

近現代英和对訳辞書における訳語変遷に関する研究

— ‘Giraffe’ 訳語の問題を中心に —

村端五郎

An Exploration on the Transition of Japanese Equivalents
in Modern-Contemporary English-Japanese Dictionaries:
With Special Focus on the Issue of the Japanese Equivalent for ‘Giraffe’

Goro MURAHATA

Abstract

The aim of this paper is to discuss transition mechanisms of Japanese equivalents in modern-contemporary English-Japanese dictionaries with special focus on the rise-decline-entrenchment issue of Japanese equivalents to the English word ‘giraffe.’ After reviewing the zoological and etymological backgrounds of the animal and its nomenclature, Japanese translation equivalents to and their explanations, if any, on the word are examined in 118 English-Japanese dictionaries published in Japan from 1862 up to the present. The results show that the Chinese character 豹駝 (‘Hyo-da’), which originates from the scientific name of the only species extant native to Africa (*Giraffa Camelopardalis*), had been most widely used until the middle of the Meiji era, then 麒麟 (‘Kirin’), originally for a fabulous animal in ancient China, until the Showa 20s, and ジラフ or キリン in Kana character have been used up to the present. Based on the findings of the transition of Japanese translation equivalents, driving factors for the cause of the rise-decline-entrenchment phenomena related to the translation equivalents for the English word ‘giraffe’ are further discussed.

キーワード：訳語変遷、英和对訳辞書、Giraffe、豹駝、麒麟

1. はじめに

筆者が永年取り組んできた研究課題の1つは、近現代にわが国で刊行された英和对訳辞書における訳語の変遷、殊に訳語の発生と消長、定着をめぐるメカニズムの解明である。例えば、村端 (2005) では、‘plum’ を梅とする誤訳と妥当な対応語である西洋李の発生・衰退・定着について検討した上で、英和对訳辞書において ‘plum’ 梅とする誤訳の修訂に決定的な影響を与えたのは世界的な植物学者の牧野富太郎であることを指摘した。また、村端 (2006, 2007)

では、古代から人間と深い関わりをもってきたリンゴの起源と名称の変遷を考察しながら、‘apple’がどのように英和対訳辞書において訳出されてきたかを明らかにした。その結果、現今一般的に使用されている林檎^{リンゴ}という訳語は、古来、中国から伝播した小果系のリンゴを指すものであり、幕末明治初期に西洋から伝播した大果系の‘apple’の訳語としては適切ではない。しかし、一時期国内で使用されていた^{セイヨウリンゴ/オオリンゴ} 苹果 という対応語は日本人一般には受け入れられず、もとの林檎という名称に回帰させたいというリンゴ産業界からの強い要望により英和対訳辞書においても苹果が姿を消して林檎が再び使用されるようになったのである。

このような研究課題の一環として、本稿では‘giraffe’訳語の問題に焦点をあて、その変遷について考察する。キリンビール商標の図柄となっている麒麟^{キリン}と動物園の‘giraffe’はかくも似つかぬものなのに、なぜ英語の‘giraffe’を麒麟とするのか、現在、中国では‘giraffe’は「長頸鹿」という字が当てられ、麒麟の字は使われないのに、なぜ、わが国では麒麟の字を使うのだろうか(湯城, 2008)。本稿では、‘giraffe’訳語の発生と消長、定着を近現代にわが国で刊行された118本の代表的な英和対訳辞書の調査を通して訳語変遷の諸事情を考察する。

2. ‘Giraffe’ とは何か

2.1 ‘Giraffe’ (ジラフ) と呼ばれる動物

英語の‘giraffe’ (以後、ジラフという) が指すものは動物園の人気ものの動物のことで、背丈が6 mにも達する、現在陸にすむ哺乳動物の中で最も背の高い動物である(富原, 1964)。ジラフを動物学的に定義すれば、アフリカ産の偶蹄目の動物で、オカピ(オカピ属)も分類されるジラフ科(*Giraffidae*)、ジラフ属(*Giraffa*)の獣で、その学名は‘*Giraffa camelopardalis*’である。蹄はシカやウシのように2つで、頸と前足が顕著に長く、体色は淡黄褐色で多少とも規則的に大きな暗褐色の斑紋があり、頭上に2本から5本の短い角があるがシカ類のそれと異なり脱落しない。小群をなしてサバンナや藪地に生息してアカシアやその他の樹木の葉及び枝を長い舌を自在に使って葉食する(スターネック, 1967)。国内の動物園で飼育されているジラフの多くはマサイキリン(*Giraffa camelopardalis tippelskirchi*)とアミメキリン(*Giraffa camelopardalis reticulata*)である。

ジラフは、現在はアフリカにのみ生息する動物であるが、Spinage (1968)によれば、約3500万年から1500万年前の中新生時代や鮮新生時代には、他の哺乳動物と同様にヨーロッパからアジアにかけて広く生息していたという。現在のジラフにすべて似ているものではないが、その化石はアフリカに加えてギリシャやオーストリア、ハンガリー、ユーゴスラビア、スペイン、イスラエル、ペルシャ、ロシア、インド、セイロン、ビルマ、トルコ、モンゴル、中国、そして日本でも見つかっている。

初期のジラフは鹿の祖先と考えられ、同時に牛属の特徴も兼ね備えており、ジラフと鹿と牛は、共通の祖から出たものと考えられている。1930年代にインド北部で巨大な牡牛に似たジラフ(*Sivatherium giganteum*)の化石が見つかった。1837年に発表された記述によると、脚と頸は比較的短いが脚の総長は現在のジラフとほぼ変わらない。しかし、後脚骨や中手骨、中足骨は現在のジラフの半分程だが厚みがある。頭蓋骨は大きくがっちりしており、鼻は短く丸ぼちゃの顔で、牡は目の後ろにかなり発達した大きな一対の掌状の角と目の上に円錐状の一対の小さな角をもつ。その小さな角は、現在のジラフの瘤に似ているうえ大きな角の生え際にはギ

ザギザがないのでエルクのそれとは異なり落抜するものではなかった。

また、ジラフ属と確認できるものの中には大きさがオカピほどで、形状が簡素で先が尖った角をもつ個体もあった。しかし、オカピは4000万年もその形状を変えずに現存していることから、ジラフとは別系と考えられている。そして、ジラフは、「古代のヤギ」を意味する '*Palaeotragine*' から進化したものとされている。

1936年に、東アフリカで見つかった動物の化石が、ジラフがアフリカに起源をもつ確たる証拠となった。その化石は、'*Climacoceras africanus*' と命名され、大きさはノロジカ (roe-deer) ほどで、落抜しない12インチほどの小さな角があり、枝分かれせず小さな瘤もある。この動物こそが原始ジラフではないかと考えられている。

1735年に『自然の体系』(*Systema Naturae*) を著したリンネは、そこで2名法という動植物の命名分を発表し、ジラフを鹿属の動物と見なし、'*Cervus camelopardalis*' という学名をつけた。その後、1756年にドイツの科学者である Jacob T. Klein は、ジラフをアンテロープやガゼル、ヒツジと同様に '*Tragus*' 属の下に分類したが、まもなくフランスの動物学者である Mathurin J. Brisson は、ジラフを固有の動物と認識して独立した属名 '*Giraffa*' を成し、以来、ジラフには現在に至るまで '*Giraffa camelopardalis Brisson*' という学名が与えられている。

2.2 'Giraffe' と 'Camelopard'

一方、言語学的な観点からジラフを見れば、その語源はアラビア語の '*zarāfah*' に由来し、原義は「疾(速)く歩むもの」である(荒川, 1967; 新村, 2018)。また、英語圏の英語辞書では、例えば、The Pickett (Executive Editor) の *American Heritage Dictionary of the English Language* (2011) では以下のように記述されている。

Giraffe. An African ruminant mammal (*Giraffa camelopardalis*) having a very long neck and legs, a tan coat with orange-brown to black blotches, and short horns. It is the tallest land animal, often reaching a height of 5 meters (16 feet). [French giraffe < Italian giraffe < Arabic dialectal *zirāfa*, probably of African origin.] [アフリカ産の反芻哺乳動物で、長い頸と足をもつ。黄褐色の外皮には、橙褐色から黒色にかけての斑点がある。短角があり、陸の動物としては背丈が最も高く、5 m (16ft) に及ぶこともある。] (筆者訳)

また、Walter W. Skeat の *An Etymological Dictionary of the English Language*. (Oxford: The Clarendon Press, 1882) では、

Giraffe, the camelopard, an African quadruped with long neck and legs. (F., — Span., — Arab., — Egyptian.) '*Giraffa*, an Asian beast, the same with *Camelopardus*;' Kersey' s Dict. ed. 1715. Here *giraffa*= Span. *girafa*. We now use the F. form. — F. *giraffe*. — Span. *girafa*. — Arab. *zarāf* or *zarāfat*, a camelopard; Rich. Dict. p. 772, col. 2. See Dozy, who gives the forms as *zarāfa*, *zorófa*, and notes that it is also called *zoráfa*.

と出ている。アラビア語を語源としてヨーロッパ諸語に広がり、フランス語経由で英語に流入したことが詳しく記述されている。ここで注目すべきなのは、訳解で取り上げている '*camelopard*' と '*camelopardus*' という語である。前者は '*giraffe*' の別称であり、後者は

1715年に出版された Kersey の英語辞書にある見出し語に相当と読むことができる。そこで、Skeat の語源辞書の ‘camelopard’ にあたってみると、次の記述が掲載されている。

Camelopard, the giraffe. (L.,—Gk.) Spelt *camelopardalis* and *camelopardus* in Kersey’s Dict. ed. 1715, and in Bailey, vol. ii. ed. 1731. After shortened to resemble F. *caméopard*, the giraffe. — Lat. *camelopardalis*. — Gk. *κάμηλοπάριδαλις*, a giraffe. — Gk. *πάριδαλις*, crude form of *κάμηλος*, a camel; and *πάριδαλις*, a pard, leopard, panther.

‘camelopard’ は、ギリシャ語でラクダ (camel) を意味する ‘*κάμηλος*’ とヒョウ (panther) を意味する ‘*πάριδαλις*’ の合成語で、それがラテン語とフランス語を経由して英語に入り、1700年初頭は ‘*camelopardalis*’ あるいは ‘*camelopardus*’ とつづっていたもので、後にそれが短縮されて ‘camelopard’ となりジラフを指す言葉として使われているというのである。

実は、前節 2.1 で触れたように、‘*camelopardalis*’ というのは、ジラフの学名 ‘*Giraffa camelopardalis*’ の種名なのである。このラテン語の種名が英語化されて、ジラフを指す言葉として使用されていたことがわかる。そこで、‘camelopard’ と ‘giraffe’ の語がどのように使われてきたのかを明らかにするため、1600年代から 2011年までの間に英語圏で出版された、筆者家蔵の辞書の見出し語や記述を調べてみた (表 1)。

表 1 英語辞書における ‘camelopard’ 及び ‘giraffe’ 見出し語の有無と表記

英 語 辞 書	camelopard (見出し語の有無と語義)	giraffe (見出し語の有無とその表記)
Skinner (1671)	(見出し語なし)	(見出し語なし)
Johnson (1755)	an Abyffinian animal (後略)	(見出し語なし)
Bailey (1775)	(見出し語なし)	giraffa
Perry (1801)	(見出し語なし)	(見出し語なし)
Walker (1824)	a large animal	(見出し語なし)
Webster (1828)	the giraff	giraff
Noble (c1835)	an Abyssinian animal	(見出し語なし)
Richardson (1836-37)	(見出し語なし)	(見出し語なし)
Boag (c1848)	the giraff	giraff
Webster (1856)	the giraffe	giraffe
Worcester (1860)	the giraffe	giraffe
Ogilvie (1861)	the giraffe	giraffe
Ogilvie (1865)	the camel panther; the giraffe	giraffe
Webster (1869)	giraffe	giraffe
Nuttall (1886)	a giraffe	giraffe

Findlater (1892)	the giraffe	giraffe
Whitney (1902)	the giraffe	giraffe
Webster (1905)	the giraffe	giraffe
Funk (1910)	the giraffe	giraffe
Webster (1920)	a giraffe	giraffe
Weekley (1921)	camel pard	giraffe
OED (1933)	giraffe	giraffe
Shorter OED (1933)	the giraffe	giraffe
Wyld (1952)	giraffe	giraffe
Webster (1953)	the giraffe	giraffe
Webster (1966)	giraffe	giraffe
Stein (1981)	Obs. a giraffe	giraffe
Webster (1981)	giraffe	giraffe
Pratt (2011)	A giraffe	giraffe

英語辞書に初めて登場したのは ‘camelopard’ が 1755 年 (Johnson) で、 ‘giraffe [giraffa]’ はその 20 年後の 1775 年 (Bailey) である。Johnson 辞書では ‘camelopard’ を「アビシニアの動物 (An Abyffinian animal)」とあるが、アビシニアというのはエチオピアの旧称である。その語義には、「taller than an elephant, but not fo thick. He is fo named, becaufe he has a neck and head like a camel; he is spotted like a pard, but his spots are white upon a red ground. The Italians call him *giaraffa*.」とあり、明らかに「ジラフ」を指していることがわかると同時に、その動物をイタリアでは、「giaraffa」(ジアラファ)と呼んでいるという記述が興味深い。英語辞書において、後者がジラフと初めて同定されたのは Webster (1828) のようである。ただし、つづりは ‘giraffe’ ではなく、 ‘giraff’ となっている。それ以前の辞書では、 ‘a large animal’ (Walker, 1824) などという記述であり、ジラフとは特定できない。1835 年頃に刊行された Barclay’s Dictionary (Noble, c1835) でも ‘an Abyssinian animal’ と出ており、この時代、ジラフはヨーロッパではまだあまり馴染みのない動物であったことがうかがえる。また、Ogilvie (1865) の ‘camelopard’ に対する第 1 義の ‘the camel panther’ という語釈は注目に値する。 ‘camelopard’ の語源であるギリシャ語の「camel ラクダ + panther ヒョウ」をそのまま語釈に当てているのである。現在に至るまで、このような語釈を取り上げているのは、この辞書のみである。ちなみに、後述するように、明治大正期の英和辞書では「駝豹」あるいは「豹駝」という漢字を当てるものが多いが、柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』明治 6 (1873) 年などは、この Ogilvie の辞書を大いに参考にしたあとがみられる。

次に、表 1 で見逃してはならないのは、英語辞書においてジラフが今日の ‘giraffe’ つづりに定着したのが、1850 年代半ばになってからと考えられる点である (Webster, 1856)。それ以前は ‘giraffa’ だったり ‘giraff’ というつづりの見出し語が見える。一方、それ以降は今日に至るまで、どの辞書の見出し語においてもジラフのつづりは ‘giraffe’ 以外は見当たらない。

2.3 ジラフの世界各地への渡来：欧米、中国、そして日本

2.3.1 欧米への渡来

ジラフは、エジプトでは遥か太古の昔から歴史とともに知られている動物の1つである（ベルトルト・ラウファー, 1992）。象形文字の1つとなっていたり、壁画や壺の図柄のモチーフとなっていたり、エジプトの人々には馴染みのある動物である。しかし、ヨーロッパにジラフが到着したのは、紀元前46年で、カエサルの凱旋行進の際に市民に公開されたものである。その珍獣は、カエサルのサーカスの見せ物にされ、ジラフの姿はローマの人々に大きな衝撃を与えたという。

ベルト・ラウファー (1992) によれば、その後、ジラフはアラビア人などによりコンスタンチノーブルなどローマ帝国内の各地にもたらされたが、ローマ帝国滅亡後はこの動物はほとんど忘れ去られフランスやイギリスに渡来したのは、かなり遅くなってからである。ジラフの名が「'garsantes' ガルサンテス」として初めて文献に登場したのも、イギリスでは1356年のことである。

ただし、11世紀から13世紀頃、イタリアでは貴族たちがアラビア人やエジプト人から盛んにジラフを手に入れて飼育していた。また、15世紀のルネッサンス時代にも植物学や動物学への興味高揚から異国の珍獣を集めて観覧する嗜好が高まり、その結果、フィレンツェやナポリなどの王族たちがジラフを含めた珍獣を南方などから輸入して飼養していたといわれている。例えば、野中 (2004) によると、イタリア北部、フィレンツェ、トスカーナ地方にあるポジッオ＝ア＝カイアノという土地では、大富豪のメディチ家は肉やチーズ製品などの実用的な利益を生み出す牛などのような動物だけではなく、ラクダやチータ、アラビア馬、そしてジラフも個人が社会的地位を誇示するためもあって外部からも観られるように飼っていたといわれている。言うなれば、富と権力の象徴としての私設の動物園である。

一方、生きたジラフがフランスのパリに到着したのは1827年である。このジラフは、エジプト統治者のモハメッド・アリから送られたもので、自然史博物館 (Jardin de Plantes) に収容され、パリ市民から熱狂的な歓迎を受けて観覧に供された (Spinage, 1968)。Spinage (1968) によると、その牝のジラフは、その後もパリ市民の目を楽しませたが16年後に死んだという。フランスには、その後もアフリカから様々な形でジラフが渡来している。

生きた1頭のジラフがイギリスに渡来したのも同じ年の1827年である。やはりエジプトの統治者モハメッド・アリから贈られたものである。Spinage (1968) によると、その当時、イギリスには動物園がなかったため、ウィンザー城に収容され1年2ヶ月ほど生存したがあまり市民の目に触れることはなかった。しかし、そのジラフが死んでから8年後の1836年には新たに牝3頭、牝1頭の4頭のジラフがロンドン動物園 (The Zoological Society of London) にもたらされた。その後、繁殖に成功して、それらのジラフから17頭もの子ジラフが誕生している。ジラフ人気は世界的に広がりを見せ、1874年には新大陸のアメリカに牝5頭、牝1頭が伝来している。それらのジラフはフィラデルフィア動物園が購入したものである。

2.3.2 中国への渡来

中国に生きたジラフが最初に持ち込まれたのは永楽12 (1414) 年というのが定説となっている (中村, 2013; Spinage, 1968; ベルト・ラウファー, 1992; 宮下, 1977)。しかし、明らかにジラフを指している記述が文献に登場するのはそれより数百年も遡る。中村 (2013) によれば、中

国の文献に初めてジラフが登場するのは、宋代 12 世紀半ば頃で、ペルシャの呼称（ウシュトゥル [ushtur ラクダ] + ガーウ [gaw ウシ]）に由来する「駝牛」であったという。その後、南宋代 (1225 年頃) にはアラビア語の ‘Zarafa’ からの造語と思われる「徂蠟」を当てる文献もあった。ここで重要なのは、これら駝牛あるいは徂蠟の字を使っていた中国文献の著者は、ジラフという動物を直接目で見て記述したものではなかったという点である。

そして、明代に入り、ようやくジラフという生きた珍獣が中国に渡来することになる。それは、明王朝がインド洋沿岸地域の探検と国々との交流を盛んに行った結果、ベンガル国王が派遣した使節の貢物の 1 つとしてジラフをもたらしたものである。興味深いことに、そのジラフを「麒麟」と呼んでいる。永楽 12 (1414) 年のことであった。貢物の 1 つにジラフが含まれていたのはベンガル国王の配慮だったのか、あるいは古来より有徳の為政者の治世下にのみ現われるとされる麒麟を時の皇帝である永楽帝に献上するという宦官らの皇帝に対するごますりからかは定かでない。

いずれにしても、永楽帝は麒麟と呼称するジラフをあまり歓迎しなかったと中村 (2013) は述べている。そして、このジラフに麒麟を当てるのは、明代のみで、その後 18 世紀頃までは、‘zarafa’ 音写の「祖刺法」などが使われた。しかし、19 世紀になるとギリシャ語・ラテン語由来の ‘camelopardalis’ にもとづいた訳の「駝豹」や「豹駝」が使われるようになり、現在の中国語訳語の「長頸鹿」が文献に登場するのは 19 世紀後半の 1856 年のことである。

このように、中国ではアフリカ産の生きた動物としてのジラフに対する訳語は、意識あるいは音訳によるものが歴史的に多い。そして、ジラフに麒麟という訳語を当てたのは明代のみで、中村 (2013) が述べるように、現存する動物としてのジラフを麒麟とするのは、「明代に限定された社会現象」(p. 39) であったと言えるだろう。

2.3.3 日本への渡来

ジラフがわが国に初めて渡来したのは明治末期のことである。わが国への動物渡来の顛末を詳細に記録した高島 (1955) によると、明治 15 (1882) 年に開園して年々発展していた上野動物園は、明治 40 (1907) 年、ドイツのハンブルグにあるハーゲンバック動物園から、後にファンジとグレーと名づけられる牝牝 2 頭のジラフを購入したという (図 1)。購入に当てた費用はジラフ代金の 16,000 円 (1 頭 8,000 円) と輸送費等を含めて総額 17,000 円であった (小宮, 2010)。

これらのジラフは 2 年前にアフリカで捕獲され、ドイツの同動物園で飼育されていたものである。ドイツの汽船に載せられ、明治 40 年 3 月 15 日に横浜に到着した。読売新聞朝刊 (明治 40 (1907) 年) は、「麒麟来 (上野動物園の珍客)」という小見出しでジラフの到着を伝えている。港からは蓋のない貨車に積んで上野に運ぶ予定だったらしい。しかし、とにかく頸が長いのである。当時の神奈川のトンネルと品川の橋を潜り抜けることは難しい

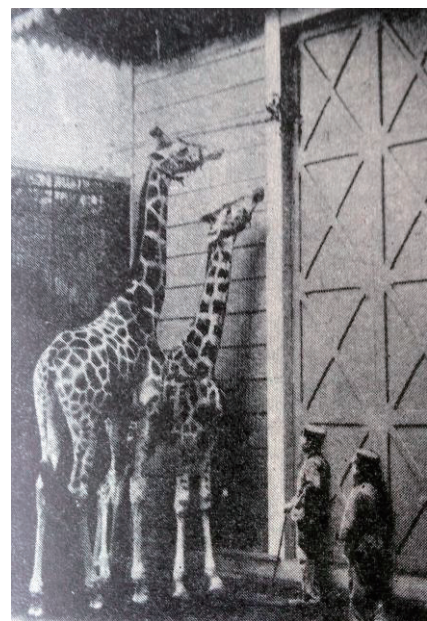


図 1 明治 40 年に上野動物園に到着したファンジとグレー (高島, 1955)

ことがわかり、横浜から海路で日本橋の河岸に陸揚げするというルートを取った。このような苦勞の末に上野動物園に到着した2頭のジラフは、到着翌月から一般公開された。平成16(2004)年から平成23(2011)年まで上野動物園長を務めた小宮(2010)によれば、わが国では初めてとなるジラフの公開とあって、この年の入場者数は100万人を超え、入園収入は48,850円で大幅な増収となった。ジラフに対する多額の支出にもかかわらず全体的には黒字になった。ジラフは大変な人気振りで、明治天皇もジラフの観覧を希望したため上野動物園から第八車に2頭を乗せて皇居まで運んだという。

当時、上野動物園では木造のラクダ小屋を改修してこれらのジラフを飼育せざるを得ない状況であった。ジラフはアフリカ産の動物である。彼らにとって木造の小屋での越冬は厳しいものがあつた。園では、とにかく暖めなくてはならないと2頭を狭い場所に閉じ込めてストーブをしきりにたいた。暖かい空気は上にいくのでジラフの頭ばかり暖める結果となった(小宮, 2010)。その影響もあってか、翌年の1月には牝のグレーが、そして3月には牡のファンジが相次いで死んでしまったのである。生存期間はわずか1年たらずであった。その後の所在や状態は不明ながら、少なくとも昭和30年頃までは、この2頭の剥製が国立科学博物館に収蔵されていたようである。

初渡来したこの2頭をめぐって2つの興味深い逸話が残っている(小宮, 2010)。1つ目は、2頭を収容するためにラクダ小屋を改修した担当者(高橋峯吉)の、ジラフに対面した時の記録である。高橋は大工とともに小屋の高さを出すためラクダ用に使用していた小屋の天井を抜いて柱を継ぎ足し、上から蓆をかぶせてジラフ小屋とした。改修が終わりいよいよ2頭を収容する時が来た。高橋はジラフを初めて直に見たとき、麒麟キリンと聞いていたので、中国伝説の神獣である麒麟の恐い顔を想像していたという。しかし、実際の動物は背丈の高さもさることながら、そのあまりにも優しい顔に驚いたという。この高橋の記録は、たとえ動物園の職員であってもこのように「麒麟キリン=中国古来の想像上の動物」と認識していた証左である。まして、一般市民にとっては、麒麟キリンはなぞの動物であり、たとえ麒麟という言葉を知っている人であっても、せいぜいそれは古代中国からの想像上の動物のイメージしかなかったものと考えられる。

2つ目はドイツから渡来したこの2頭のジラフが上野動物園(皇室博物館天産部管轄)の園長を辞職に追い込んだという逸話である(小宮, 2010; 佐々木, 1987)。ジラフの購入については、ファンジとグレーが到着する3年前から動物園の所有者であり動物商人でもあつたハーゲンバックから積極的な売り込みがあつた。日露戦争の始まった時期でもあり、年間の動物購入の予算が2,000円程度であつたためジラフとシマウマの牡牝で14,500円という価格提示に応じることはできなかった。しかし、明治39(1906)年に日本の勝利に終つた日露戦争が終結し、日本は国内外に国威を示す機会でもあつたため、機を見るに敏なハーゲンバックから再度ジラフの売り込みがあつた。他から購入希望があるので至急購入の意図を回答するようにという手紙が上野動物園の監督(園長)宛に届いた。当時の監督、実質的には園長であつたのが東京帝国大学教授で動物学者の石川千代松であつた。石川は購入を決断するが、所管である宮内省から事前承諾を受けていなかった。年間予算の7倍を超える巨額の支出について事務手続を怠つたことが大きな問題となった。さらに、購入する動物について宮内省に説明する際、「ジラフ」という名称を伝えても単なる1種の動物という印象で説得力がないと判断したのか、ジャパン・ブルワリー・カンパニー(現キリンビール株式会社)のビールのラベルとしても採用され(夢現舎, 2017)、謎に満ちた中国古来の想像上の動物を指す言葉として知られていた麒麟という名

称を使って、購入の経緯と意義を説明した (NHK, 2016)。これらのことが問題となり、ジラフが到着して2ヶ月程経った頃、石川は「願ニ依り兼官ヲ免ズ」という辞令を当時の宮内大臣である田中光顕から受け取り、依願退職をせざるを得なくなった (小宮, 2010)。事務手続の不手際があったとしても、また、中国古来の謎の動物としての麒麟ではなくとも、多くの国民がジラフを見るために動物園を訪れており、ジラフの購入は必ずしも失敗ではなかったのになぜ辞任に追い込まれたのか。

動物園の歴史に詳しい佐々木 (1987) は、この辞任問題はあくまでも憶測の域をでないと前置きした上で、当時の宮内大臣の田中光顕と園長の石川千代松の間に生じていた私的な事情がその背景にあったのではないかとしている。石川は田中大臣と同郷 (現高知県佐川町) の植物学者で、英語辞書における訳語の変遷にも大きな影響を及ぼした牧野富太郎博士を教授に推薦するように田中から依頼されていた (小宮, 2010)。しかし、小学校しかでていない (実際は小学校を卒業すらしていない) 牧野を東京帝国大学に受け入れることを拒んだのである。牧野は、明治26 (1893) 年に東京帝国大学助手に任官されているので、田中の推薦依頼とそれに対する石川の拒否の件については、それ以前のことなのか、明治26年からジラフが日本に到着する明治40 (1907) 年までの間におきたことなのかは定かでない。いずれにしても、2人の間に牧野の任官 (昇任) をめぐるとすれ違いがあり、「田中は石川の更迭の機会をねらっていたとされ、石川が天産部を去った五ヶ月後、牧野は天産部嘱託の辞令を受けている」、と小宮 (2010, p. 73) は述べている。

さて、ジラフの初渡来後の25年間は、わが国にはジラフはいなかった。そして、昭和8 (1933) 年、上野動物園は、サーカス団とともに来日した牝牝のジラフを牝牝2頭購入することになった。これがわが国における2度目のジラフの渡来である。明治に渡来したファンジとグレーがわずか1年ほどで死んだ反省から、部屋の室温を逆に下げて日本の気候に慣らし、冬季も屋外に出して運動をさせた。それが功を奏してか、その2頭は永く生き延び、繁殖にも成功した (小宮, 2010)。その後、昭和19年までの間に井之頭や大阪、阪神、名古屋、京都の各動物園にジラフが次々に到着している。ジラフはヒョウやライオン、ゾウなどと違って温かな性格の動物であったため戦時中にも殺処分を逃れ、上野動物園では3頭のすべてが生き延びたという。

2.4 ジラフを直に見た日本人

ジラフの剥製がわが国に持ち込まれて一般に公開されたことがある。明治10 (1877) 年のことである。明治政府のもと、わが国の物産・博物行政に深く関わり、殖産興業政策の一環として博覧会や展示会の計画、開催に貢献した田中芳男 (西村, 1999) が前年の明治9 (1876) 年に米国・フィラデルフィアで開催された万国博覧会に参加した際に持ち帰ったものである (みやじま, 1983)。明治10年9月20日から60日間博物館で一般公開されたという。同年9月15日の読売新聞朝刊は (振り仮名は一部省略)、「米国の博覧会にて交換された剥製の麒麟、獅、虎、白熊その他の動物や豪州産の鳥獣と澳國へお詔へになつて居る工業についての物品が今度山下の博物館へ来るので今月二十日から六十日の間臨時に開館して縦覧を許されます委しくハまた」と伝えている。また同9月22日朝刊には (振り仮名は一部省略)、「(略) 今度山下の博物館へお備へに成つた剥製の麒麟ハ高さが九尺五寸ほど丈けが五尺ほどあり毛ハ白と茶にて鹿に似て居り (略)」とある。日本人が国内においてジラフを直接目にしたのはこの時が初めてとなるだろう。

では、海外でジラフを直に目にした日本人はいなかったのだろうか。いたとすれば、それはいつ頃のことか、その人物はジラフをどう呼んだのだろうか。結論を言うと、それは文久2 (1862) 年のことで、徳川幕府が派遣した竹内下野守や福地源一郎、福沢諭吉、箕作秋坪らを含めた幕末の武士 38 人一行であった (市川著・楠家編訳, 1992)¹。使節団の一行は、ロンドン動物園でジラフを初めて見て、「ジラーベ」と呼び、「之獵獅」の漢字を当てたという記録が残っている (市川著・楠家編訳, 1992)。「ジラーベ」というのは、‘giraffe’ の音訳だろう。帰国後、彼らは幕府の学問所である蕃書調所 (後の洋書調所、開成所) の物産掛を拜命していた田中芳男らに視察内容を詳しく報告したに違いない。そして、そのことが後に田中が欧米の動物園を自ら精力的に視察して明治 15 (1882) 年開園の上野動物園へとつながっていったと思われる。

福沢諭吉を含む文久遣欧使節団が欧州を訪れる 270 年以上も前に、欧州を訪問した使節団があった。日向国 (現宮崎県) の伊東マンショ他 3 少年がポルトガルやイタリアなどを訪問し、ローマ教皇に謁見した「天正遣欧少年使節」の一行である。彼らは 1582 (天正 10) 年に長崎を出帆して、1584 (天正 12) 年にポルトガルに到着した。その後、ローマに向かう途中フィレンツェに立ち寄っている。松田 (2001) によれば、「使節たちはフィレンツェで動物園を訪れ、そこで獅子、虎、熊、狼などを見て大いに喜んだ」(p. 174) という。残念ながら、この件の中にジラフは見えないがフィレンツェを含め、イタリア各地の貴族が 11 世紀以降、特にルネッサンス時代に盛んに珍獣を集めて飼養していたというので (野中, 2004)、天正使節一行が訪れた動物園にジラフがいた可能性は高い。

事実、フィレンツェ大公フランチェスコ一世の、動植物画や生き物としての動物の蒐集活動について考察した和田 (2003) によれば、「キリンは、当時大公のコレクションとしてフィレンツェの動物園で飼育されていた」(p. 184) とあるので、伊東マンショらがキリンを見たとしても不思議ではない。

2.5 日本への渡来動物「ジラフ」は、なぜ「キリン (麒麟)」と呼ばれるようになったのか

アフリカ産のこの特異な動物を見て麒麟と名づけた日本人は誰だったのだろうか、それはいつ頃だったのだろうか。ジラフの牝牝 2 頭がわが国に初めて輸入されたのは明治 40 (1907) 年である。それを観た日本人の 1 人が動物学者の石川千代松であった (荒川, 1967)。一説には石川がこの特異な動物を見て、それを中国伝説上の獣と結びつけて麒麟と命名したとされている (吉田, 2001)。しかし、すでに述べたように明治 9 (1876) 年にフィラデルフィアで開催された万博で田中芳男が入手した剥製の中に麒麟^{キリン}という動物もいたことを当時の新聞も伝えているのである。したがって、ジラフという現存するアフリカ産の動物については実際の動物は日本に存在していなくともこの珍獣の名称を伝えるものが明治 9 (1876) 年頃までには存在していた可能性は高い。

¹ この 27 年前の 1835 (天保 6) 年にロンドンの土を踏んだ最初の日本人がいた (春名, 1979)。音吉ら 3 名の漂流民である。春名 (1979) によれば、尾張回船・宝順丸の乗組員だった 3 人は、太平洋上で難破して他の 11 人は死亡したが、奇跡的にも 14 ヶ月後に米国西海岸に漂着して助かった。その後、イギリス船で英国に渡っている。テムズ川の船の中で 10 日間過ごした後、日本に向けて出帆する前日の 1 日だけ上陸が許されてロンドン市内を見物して歩いた。しかし、2.3.1 節で述べたように、ちょうどこの時期にはロンドンにはジラフは存在しなかったため、音吉らが生きたジラフに出会った可能性はない。なお、序でながら、福沢諭吉らが欧州に向かう際立ち寄ったシンガポールで、帰国せずに当地に滞留していた音吉に寓会している (春名, 1979)。

そこで、博物学関連の文献に当たってみたところ、ジラフに麒麟の字を当てた書物に熊秀英著『蛮語箋 附萬國地名箋』蘭香室蔵版、寛政10(1798)年(早稲田大学)がある。「獣部」に「麒麟 | カーメロ、パルダリュス」とある。「ジラフ giraffe」ではなく、より古い呼名の 'camelopardalis' を対応語としている。中国・明代に使用されたこの麒麟という呼名をどのような文献から引いてこの『蛮語箋』で使用したのかは定かでない。成立年が不詳ながら、江戸中期頃に著された手書きの動物写生図がある。桂川国瑞(宝暦元(1751)年生 - 文化6(1809)年没)の手になる『動物写生図』(国立国会図書館蔵)である(図2)。その冒頭に「麒麟」という字が添えられた図とその詳しい解説がある。「これが日本における最初のジラフ図であろうと言われ」ている(湯城, 2008, p. 73)。解説は長文のため省略するが、重要な記述がみえる。中国の書物によると、麒麟というのはアデン産の動物で、前足が9尺あまりもあり頸が長く短い肉角が2つあり、体は鹿で蹄は馬に似ているという。さらに、西洋の文献に「伎刺巴²」とでていいるものがあるが、その身体は駱駝、馬、鹿に似ていて豹文があり、尾は牛の尾をしているので、中国でいう麒麟と西洋でいう「伎刺巴(ジラハ=ジラフ)」が、その特徴が符合するので同じ獣であろうとしている。また、江戸後期の本草学の傑作の1つとされる高木春山『草木図説』天保3(1832)年~嘉永5(1852)年(著者没により195巻で未完成、原本は西尾市岩瀬文庫蔵)がある(高木春山著/荒俣宏監修/奥本大三郎・新妻昭夫・渡辺政隆校註, 1989 [1852])。名称「麒麟」に添えられている図は、桂川国瑞のそれに酷似している。おそらく、高木春山は桂川国瑞の麒麟図を参考に描いたものであろう。



図2 桂川国瑞筆「麒麟」の図(『動物写生図』成立年不詳)

次に、蘭学時代に大いに参考にされ、文化13(1816)年に成立のDoeff編『長崎ハルマ』を底本として幕末は安政5(1858)年に成立した桂川甫周校訂『和蘭字彙』山城屋佐兵衛蔵版(早稲田大学)を開いてみた。しかし、'kameel'「駱駝」という項はあるが、'camelopard'や'giraffe'に相当する見出し語はみられなかった。さらに、田中芳男訳『仏蘭西獣図訳名』文久3(1863)年(国立国会図書館蔵)をみると、そこでは、「girafe ギラフ 豹駝 地球説略 之獵獅 博物新編 又或説ニ麒麟ニ當ル説アリ」とある。田中は、音訳を与え、先行文献から「豹駝」と「之獵獅」を引いている。前者は蔓延元(1860)年成立のRichard Quarterman Way著・箕作阮甫訓点『地球説略』からの引用である。箕作は、「努皮亞國ノ圖³」の節で「奇獸アリ毛文豹ニ似テ身體駝ニ似タリ頸甚タ長シ其高キ統約スルニ一丈餘アリ故ニ名ツケテ豹駝ト曰ク」とし、「豹駝」という名を取り上げている。英和対訳辞書における'giraffe'及び'camelopard'の訳語変遷の節で詳述するが、箕作阮甫が取り上げ後に田中芳男が引いたこの「豹駝」という名称

²「伎刺巴」は「ギラハ giraffa」、すなわち「ジラフ」を指したものである。

³「努皮亞」(ヌビア、Nubia)国というのは、エジプト南部からスーダンにかけて存在していたヌビア王国、地域を指す。

は慶応2(1866)年に刊行された堀達之助編・堀越亀之助補『改正増補英和对訳袖珍辞書』で採用され、その後の訳語変遷に大きな影響を与えている。この辞書の改正増補の補佐として田中芳男が加わっていることから、英和对訳辞書に「豹駝」の字を導入したのは田中芳男で間違いないだろう。そして、田中芳男の『仏蘭西獣図訳名』で注目したいのは、麒麟と呼ぶ場合があるという記述である。すなわち、幕末のこの時期にすでにジラフを麒麟とも呼ぶことを示す証左である。

また、田中芳男訳の『泰西訓蒙図解(下)』明治4(1871)年には、以下のようにドイツ語と英語、フランス語による見出し語で日本語(漢字)と中国語(漢語)の対応語とそれぞれの出典とジラフの図、解説が付されている。

Eine Giraffe. / A giraffe. / Une giraffe.

麒麟海国図誌 豹駝地球説略 長頸鹿智環啓蒙

亜非利加洲ノ内地ニ産スル獣ニシテ其大サ象ニ亞ク馬頭牛尾鹿蹄頸ハ駱駝ノ如ク頂ニ赤褐色ノ鬣アリ全身灰白色ニシテ黒褐色ノ豹斑アリ後部ニ至ルニ従ヒ淡赤色ヲナス頭ニ二ノ肉角アリ性怯ニシテ驚易ク又善ク疾走ス

この訳解によると、この頃までにはジラフに対して日本語では「麒麟」あるいは「豹駝」という字を、中国語では「長頸鹿」という字を当てていたことがわかる。そのことを追認する文献に石橋政方訳・嶋桂潭校正『改正増補 英語箋』万笈閣、明治5(1872)年(早稲田大学)がある。そこでは、'giraffe' 見出し語に対して、中国では19世紀以来使用されてきている「長頸鹿」を当てている。さらに、田中芳男が手がけた明治6(1873)年『博物懸圖 動物第一 獣類一覧』文部省(国立古文書館蔵)でも図入りで「麒麟キリン麒麟」とでている(図3)。

これらのことを総合すると、わが国では明治40年に日本に渡来したジラフを石川千代松が実見して麒麟キリンと命名したとするのは正確さを欠く(湯城, 2008)。断言はできないが、宝暦元(1751)年に生まれ、文化6(1809)年に没し、生前に『動物写生図』著した桂川国瑞が、わが国で初めて珍獣ジラフに麒麟という名称を与えた可能性が高い。それを高木春山が引継ぎ、幕末になって田中芳男らが麒麟をはじめ、豹駝、長頸鹿の名称を導入したものと考えられる。



図3 『博物懸圖 動物第一 獣類一覧』明治6(1873)年(一部)

このように、実際の動物ジラフが日本に輸入される遙か以前に、この珍獣に対しては麒麟キリンと命名されていたことが分かる。最初の命名者ではないにしても、幕末から明治初期に欠けて多くの博物学関係の文献を世に出した田中芳男が豹駝や長頸鹿などとともに麒麟の名称を国内に広め、ある意味では定着させたのだろう。しかし、田中芳男が、後に『改正増補英和对訳袖珍辞書』の改正作業において、'giraffe' 及び 'camelopard' に対して麒麟を使用せずに豹駝の字を選択した理由は不明である。麒麟という字は次節で詳述するように、元来、中国由来の想像上の動物を指す言葉であり、麒麟とするとそれと混同してしまう危険性があること、一方、豹駝は、一名 'camelopard' の文字通り

の義を表現するので、その方が望ましい言葉と判断したのかもしれない。

なお、田中芳男は、幕府の命を受けて慶応2 (1866) 年にパリで開催された第2回万国博覧会に参加した際にパリの自然史博物館 (Jardin de Plantes) を訪れ、その中にある動物園も見学している (みやじま, 1983)。その博物館には1827年に生きたジラフが到着して、それ以来、市民に公開するために飼育されていたので、田中芳男が同博物館を訪問した際にジラフを実見したとしても不思議ではない。田中芳男は、また、明治9 (1876) 年に米国・フィラデルフィアで開催された万国博覧会にも参加している。パリ・自然史博物館への訪問以来ずっともち続けてきたわが国における動物園の開園に向けて、「とりあえず剥製でもがまんをして『麒麟 (キリン)』獅子 (ライオン) 虎 (タイガー) 白熊の剥製標本を買い求めて日本に送った」 (みやじま, 1983, p. 80) とあるので、このことからパリで生きたジラフをすでに観覧してきており、何とかそれをわが国に持ち込んで市民の目に供したいと田中芳男は考えていたものだろう。

3. 麒麟 (キリン) とは何か

3.1 中国における「麒麟 (キリン ‘Qilin’)」

現在の中国語では、ジラフは「チャンジンルー長頸鹿」と訳し、麒麟とするのは日本だけである (宮下, 1977)。しかし、言うまでもなく麒麟は中国由来の言葉である。中野 (1983) は、麒麟の来歴に関する先行研究を引いて、『詩経』以来の文献では「麟」の一字だけで表わされることが多く、後に麒が雄を、麟が雌を指す区別が生じたとしている。また、初期の文献では名君が出て仁政 (人々を労り慈しむ政治) が行われれば麒麟が現れる伝承として記述されていた。そのことは谷崎潤一郎の作品「麒麟」でも取り上げられている。ある「男の子が産まれた時、魯の国には麒麟きりんが現れ、天には和楽わらくの音おとが聞こえ」 (谷崎, 2010 [1910], p. 102) てきたという。この男子が孔子である。

この仁獣、麒麟の身体属性を見ると、体は鹿で、牛の尾をもち、蹄は馬で、頭頂には1本の角がある。この角については、鹿の角のように再生のシンボルであるとか、生殖のシンボルであるとされ、鹿の角と異なるのは角の先端には肉が詰まっているという。このことは、前節で触れた田中芳男訳『泰西訓蒙図解 (下)』明治4年に、現実の動物ジラフの「頭ニ二ノ肉角アリ」と記述して、一角ではないものの、2つの「肉角」がある、という共通点がある。古代の中国では、この肉角の話がさらに発展し、麒麟の角はファリック・シンボル (男根的象徴) と考えられていた。

川端 (2011) によれば、民を統治し、徳をもって治めるとおのずと麒麟や鳳凰などの瑞獣や瑞鳥が為政者のまわりに集まってくるのは、古代より考えられていたことではある。しかし、周代 (前480頃) では、麒麟は瑞獣と同時に実在する動物と考えられていたという。宮下 (1977) によれば、麒麟は、古くは小形の鹿でヨーロッパからシベリア、朝鮮半島に分布するノロと呼ばれる角のある鹿に似ていたというので、その姿に多少の相違点はあったにせよノロ鹿が麒麟の原形であったと考えることもできる。

また、原産地である中国では野生のものが絶滅した珍獣がいる。シフゾウ (*Elaphurus davidianus*) である。漢字では「四不像」と書く。一見「象 (ゾウ)」の一種と思われがちだが、ダヴィッド・ジカ (佐々木, 1987) と呼ばれるように鹿の仲間、変わった形の角や体型をしている。この珍獣は、1865年2月、中国皇帝の庭であり獵場である南苑で秘蔵の動物

として飼育されていたのをフランスの宣教師であるアルマン・ダビッド (Armand David) が監視の目を盗んで堀によじ登って発見したという (小宮, 2010)。今まで見たことのない不思議な動物で、「蹄似牛非牛、頭似馬非馬、身似驢非驢、角似鹿非鹿」(小宮, 2010, p. 48) というように、蹄は牛に似るが牛ではない、頭は馬に似るが馬ではない、身体は驢馬 (ロバ) に似るが驢馬ではない、角は鹿に似るが鹿ではない。それら4獣のイメージ(像)をもって似ているがいずれの獣にも非ず (金田一・池田, 1978)、というところだろう。その後、この門外不出の珍獣は、外交努力によってフランスやイギリスが入手に成功し、イギリスでは大いに繁殖したという。わが国にも明治 21 (1888) 年に牝牝 2 頭のシフゾウが特命全権大使として北京にいた榎本武揚の仲介で清政府から贈呈されている。中国では黄河の大氾濫などにより囲いから逃げ出し、人々の食料になるなどしたため絶滅した (小宮, 2010)。

これを上で述べた仁獣の麒麟の身体的特徴および、中国の古い文献、王圻纂集他『三才図会』萬曆 37 (1609) 年 (図 4) の記述及び図に当てはめてみれば、「身似鹿非鹿、尾似牛非牛、蹄似馬非馬」となり、その上で頭上には一角をもつ、ということになるだろう。

麒麟

大載禮毛虫三百六十而麒麟為之長說文牝曰麒麟牡曰麟牡鳴曰遊聖牝鳴曰婦和春鳴曰扶幼秋鳴曰養緩春秋感精符王者不刳胎不破卵則麒麟出于郊孫鄉子曰王者好生惡殺則麟遊于野或云麟有角麒似麟而無角宋均曰麒麟色青黃說苑云麒麟麇身牛尾馬足圓蹄一角角上有肉

このように、身体は鹿に似るが鹿ではない、尾は牛に似るが牛ではない、蹄は馬に似るが馬ではない、上方に肉のある一角がある、という不思議な鹿はノロ鹿の場合もそうであったが、特徴に多少のズレはあるものの、このシフゾウも想像上の仁獣である麒麟の淵源であった可能性は否定できない。身体的特徴もさることながら、中国では歴代皇帝がシフゾウの角を漢方薬として使用していたことも為政者とこの珍獣との結びつきを感じさせるからである。歴代皇帝は、秘蔵の動物として南苑と呼ばれる広大な庭で飼育していた (小宮, 2010)。シフゾウは中国では一旦は絶滅したが、海外での繁殖により世界各地の動物園に広まり、現在、日本では熊本市動植物園などいくつかの動物園でこの珍獣が飼育されている。

さて、漢代になると被葬者の高い徳や善行を象徴するように、墓室の壁面に画像石の題材の 1 つとして麒麟が描かれるようになった、と川端 (2011) は言う。著者の推論では、このように墓室に瑞獣として描かれるようになったことで画家などの豊かな空想や創造性により、空想的な要素が徐々に付加されて後に伝わるような「鹿の体に蹄は馬で、尾は牛、額には鱗があり、頭には一角」という合成の珍獣に変身していったのではないだろうか。



図4 王圻纂集他 (1609).『三才図会』106巻.[26]、(国立国会図書館蔵、近代デジタルライブラリー)(明)王圻纂集[他]、萬曆37[1609]序刊、第十三函 鳥獸図会 三巻 獸類、「麒麟」

中国では、ジラフのことを12世紀前半では駝牛という呼名があった(川端, 2011)。そして、1220年代には徂蠟という呼名もあった。さらに、時代は下り15世紀に入ると麒麟という呼名(漢語)が当てられるようになる。しかし、この麒麟という漢語が当てられたのは明代のみで、その後は現在の長頸鹿が使われ定着した。したがって、明代以外の時代で麒麟と言えれば中国では平和と良い政治の象徴である瑞獣を指していたと言える。

「キリンも老いぬれば駑馬に劣る」という諺がある。ここに出てくるキリンは、鹿偏の麒麟ではなく馬偏の騏驎である(宮下, 1977)。この諺は、新村出『広辞苑』第7版によると、中国戦国時代の縦横家が諸侯に述べた策略を漢の劉向という人物が国別に編集した『戦国策』に記載されている。大槻文彦『大言海』(昭和9年)の「駑馬」の語釈にあるように、騏驎というのは、1日に千里を駆ける名馬、駿馬を指し、それも年をとると足の遅い馬、「駑馬」に劣るという内容である。わが国では、この騏驎と麒麟を同一視することがあるが、駑馬と比較するには、駿馬は鹿ではなく馬だから麒麟とするのは誤りである。宮下(1977)は、日本では麒麟に誤るものが多いとして、もし麒麟の字を使えば同類の比較ではなくなり、何が劣り何が秀れているのかの解釈に苦しむとして、「こともあろうに馬と鹿とをとりちがえるとは、まさに馬鹿馬鹿しい」(p. 80)と冷笑している。

3.2 日本における「麒麟(キリン 'Kirin')」

前節では、ジラフは中国では長頸鹿で、麒麟とするのは日本だけであると述べた。では、わが国では麒麟という言葉はどのように使用されてきたのか。麒麟という言葉がいつわが国に伝播したかは定かでないが、1つの可能性としては中国産の陶器とともにわが国に伝わった可能性がある。例えば、佐賀県立九州陶磁文化館には、14～19世紀の元時代から清時代の中国磁器を中心としたもの(富永コレクション)が多数所蔵されているが、その中の1つに「染付麒麟文大皿」というものがある(佐賀県立九州陶磁文化館, 2016)。これは、中国・漳州で16世紀後半に作られたもので中央に麒麟が見える。図の解説によると、この皿の生産地は中国・景德鎮で16世紀前半のものであるという。皿の内底中央には、くびを上振り上げたような麒麟が描かれている。このように、中国の伝説上、想像上の麒麟は、わが国に輸入された磁器とともに、その染付文として伝播したものと考えられる。なお、この大皿に描かれた麒麟は日本の近代化に大きな功績を残したThomas B. Gloverが三菱の岩崎彌太郎の支援を受けて設立したジャパン・ブルワリー・カンパニーの商品として明治21(1888)年に発売した「キリンビール」のラベル(夢現舎, 2017)と酷似している。

さて、麒麟の字が最初に登場するのはいつ頃だろうか。これも定かではないが、中村惕齋編の『訓蒙図彙』寛文6(1666)年に麒麟の字が図とともに見える。麒麟の図と、「牝曰麒牡曰麟」という語釈がある。牝を麒と、牡を麟という、と呼ぶとしているが、「これは惕齋の誤りで、正しくは逆である」(石上, 2020, p. 149)。惕齋の図をみると、この獣は明らかに中国でいう瑞獣であり、ジラフとは異なるが四不象のような実存する珍獣をさす言葉である。同じく中村惕齋編の『頭書増補訓蒙図彙』元禄8(1695)年にも「麒麟」の図と「麒麟ハ仁獣也 一角あり牡を麒といひ牝を麟といふ 生虫をふまず生草を踏まず 聖人の世にいつ」という解説がある⁴。麒麟は仁獣で、一角があり、牡を麒と言い、牝を麟と言う。生きている虫や生草を踏まず、

⁴ この増補版である元禄版の『頭書増補 訓蒙図彙』元禄8(1695)年(国立国会図書館蔵)では、「牡を麒といひ、牝を麟といふ」と出ており、寛文版のこの誤りは訂正されている。

聖人の世に現われる獣である。そして、18世紀に入り、先に引用した熊秀英著『蛮語箋』寛政10(1798)年成立、蘭香室蔵版には、「麒麟 カメロ、パルダリュス」という項がある。古名を使用しているが、アフリカ産の動物ジラフを指している。つまり、この頃になると、麒麟はアフリカ由来の「ジラフ、カメロパルダリス」をさす言葉としても使用されていたのであろう。

しかし、明治も半ばになると状況が変化してくる。大槻文彦『言海』明治37(1904)年では、以下に示すように、動物のジラフと瑞獣の麒麟を明確に区別している。

ヒョヘうだ 豹駝 獣の名、亞非利加ノ産、高キハ二十尺ニ至ル、前脚ト頸ト甚ダ長シ。ジラフヘ。(古ヘイヘル麒麟、是レカトモ云)

きりん 麒麟 支那ニテイフ想像上ノ獣ノ名、仁獣ト称シ、此獣、出ヅレバ、聖人世ニ出ヅル瑞ナリトス、身ハ麋^{クジカ}ノ如クニシテ大ク、尾ハ牛ノ如ク、蹄ハ馬ノ如クニシテ、一角アリ、毛ハ五彩ニシテ、腹ハ黄ナリトイウ。

さらに、大槻は『大言海』昭和7(1932)年において、「今、じらふ(Giraffe)ト云フ獣ヲ、麒麟ニ充ツルハ、妄ナリ」として、動物ジラフを想像上の獣である麒麟に当てるのはでたらめであるとしている。博物学的あるいは動物学的にみれば、動物園にいるジラフを伝説の神獣麒麟と結びつけるのは混乱をまねくのでジラフはジラフと呼ぶべきで、麒麟と呼ぶべきではないという主張であろう。しかし、これは大衆には受け入れられず、麒麟が生き残りジラフはほぼ死語となった(吉田, 2001)。

昭和になると、例えば、西尾実・岩渕悦太郎『国語辞典』昭和38(1963)年では、「①アフリカ特産の哺乳類。くびと前足が長く、獣の中で一番背が高く、六メートル近い。からだは白または淡黄褐色で、褐色か黒褐色の大きなまだらがある。木の葉や芽を食べる。ジラフ。②中国で、聖人の出る前に現われるとされていた想像上の動物。雄を「麒」、雌を「麟」という。」という語釈があり、「麒麟きりん」の第1義として動物ジラフを挙げるようになる。山口(2008)は、「英語名ジラフ(giraffe)という言い方も入ってきたが、現在はキリンという名称が普通になって」おり、「初めて見るジラフという奇妙な動物に麒麟という名を当てはめて呼び、その見立ての巧みさが受け入れられ、定着するにいたった」(p. 291)としている。

そして、現今ではどうか。現今広く使用されている国語辞典にける麒麟の定義をみてみよう。新村出『広辞苑』第7版平成30(2018)年では、3つの語義を示している。

- ①(雄を「麒」雌を「麟」という)中国で聖人の出る前に現れるという想像上の動物。形は鹿に似て大きく、尾は牛に、蹄は馬に似、背尾は五彩で毛は黄色。頭上に肉に包まれた角がある。生草を踏まず、生物を食わないという。一角獣。幸徳紀「鳳凰・一・白雉・白鳥、かかる鳥獣より」
- ②最も傑出した人物のたとえ。浄、国性爺「日本の一是なるはと異国に武徳照しけり」
- ③〔動〕ウシ目(偶蹄類)キリン科の哺乳類。頭までの高さは四メートルを超え、哺乳類中もっとも高い。雌雄とも角がある。毛色と斑紋は亜種によって差がある。サハラ砂漠以南のアフリカの草原に分布。ジラフ。

①の語義によれば、漢字の麒麟は中国の想像上の動物を指す。体は鹿で、牛や馬の一部を合成し、瘤状の肉角をもつという不思議な風貌を持つ、いわば架空の動物である。②は、①を比喩的に人に例える使い方である。③は、前節で検討した動物ジラフに対応したものである。元来、

麒麟というのは、①に由来するものであるから、富原 (1964) が述べるように「ジラフをきりんと言うのは俗称であ」(p. 427) り、したがって、正確に言えば、たとえ「きりん キリン」と仮名表記しても③の意味は適切ではないものの、現今の日本語では動物園で人気のあるアフリカ産の動物をも慣習的に指すことをこの辞書は伝えている。

以上のことを概略まとめると、わが国における麒麟は以下のように時代とともに変化しながら語用されてきた。

14 世紀から 17 世紀：中国の珍獣・想像上の動物（陶器などの紋様として渡来か）

18 世紀から 19 世紀：①動物ジラフ（カーメロ、パルダリュス）、②中国の珍獣・想像上の動物

20 世紀：①中国の珍獣・想像上の動物、②動物ジラフの俗称（正しくはジラフ）

21 世紀現在：①動物ジラフ（仮名、きりん・キリン）、②中国の珍獣・想像上の動物

麒麟は、当初は中国の珍獣・想像上の動物を指す言葉として使われていたが、18 世紀になると引続き中国の珍獣を指す側面を残しながらも、第 1 語義としてアフリカ産動物を指すようになった。しかし、おそらくは博物学、動物学などの発展にともない、動物ジラフに麒麟の字を当てることの妥当性が問われ、中国の珍獣が第 1 語義として復活し、麒麟はあくまでも動物ジラフの俗称に位置づけられようになる。しかし、麒麟という言葉は、動物ジラフを指す言葉として徐々に定着してきたことにより、現在では、漢字の麒麟は中国の珍獣をイメージすること、さらに、動植物は辞書では仮名表記にすることからその使用は避けるが、仮名のきりん・キリンは、動物ジラフを指す言葉として一般的に定着しているのである。

4. 英和対訳辞書における ‘giraffe’ (‘camelopard’) 訳語の変遷

遠藤 (1991) は、「キリン」の訳語について、蘭学時代、英学初期時代、中国での訳語、明治前期、明治後期・大正時代の各時代等の代表的な辞書を引いて考察している。しかしながら、各時代区分で参考にした辞書数が 3 冊程度とかなり数が少ないこと、昭和、平成期の辞書についてはまったく触れていないこと、これらのことから、より本格的な調査が必要である。

そこで本研究では前節までの考察を踏まえ、幕末は文久 2 (1862) 年から令和 2 (2020) 年までに、わが国で刊行された主な英和対訳辞書 118 本における ‘giraffe’ 及び ‘camelopard’ の訳語、語釈の変遷を検討することとした。予備調査の結果に基づき、以下の 5 つの時代区分ごとに考察を進める。

- (A) 文久 2 (1862) 年 ~ 明治 21 (1888) 年
- (B) 明治 22 (1889) 年 ~ 大正 14 (1925) 年
- (C) 昭和 2 (1927) 年 ~ 昭和 27 (1952) 年
- (D) 昭和 28 (1953) 年 ~ 昭和 56 (1981) 年
- (E) 昭和 59 (1982) 年 ~ 令和 2 (2020) 年

異版のある辞書を検討する場合には、辞書名の後に版次を示した。なお、以下において、【 】内は ‘camelopard’ の訳語、語釈を示し、見出し語のない辞書の場合は [無] 【無】と表記した。

以下、5つの時代区分にそって訳語の変遷や特記すべき点について考察していく。

(A) 文久2(1862)年～明治21(1888)年

わが国初の本格的な刊行英和対訳辞典の初版の1)では‘giraffe’ ‘camelopard’のいずれも「獣ノ名」が使われている。

1) 堀達之助『英和対訳袖珍辞書』初版、文久2(1862)年、「獣ノ名【獣ノ名】」

英和対訳辞書ではないが、天草で刊行された切支丹版『羅葡日対訳辞書 *Dictionarium Latino Lusitanicum ac Japonicum*』文禄3(1595)年には、‘giraffe’の見出し語はみられないが、‘camelopardalis’の項がある。そこには、「Lus. Hum animal. Iap. Qedamonono na.」とでており、「獣の名」と解説している。1)がこの切支丹本を参考にしたかどうかは定かでない。いずれにしても、日本人にはまだ馴染みのない野獣故に、その名称もわが国の文化にはまだ存在しない獣であったことを物語っている。また、寛政10(1798)年に成立した熊秀英著『蛮語箋 附萬國地名箋』では、前述したように「麒麟 | カーメロ、パルダリユス」とでているので堀達之助はこの和蘭本を参考にしていないことは明らかである。また、『英和対訳袖珍辞書』の訳出に参考にしたとされる(岩崎, 1935)安政5(1858)年に成立した桂川甫周校訂『和蘭字彙』にはジラフ関連の見出し語はみられない。しかし、2)の改正増補第2版、慶応2(1866)年では、‘camelopard’を「獣ノ名」としているものの、‘giraffe’に対しては「豹駝」という訳語が早くも登場している。

2) 堀達之助・堀越亀之助補『改正増補英和対訳袖珍辞書』第2版初刷、慶応2(1866)年、「豹駝【獣ノ名、豹駝】」

3) 堀達之助・堀越亀之助補『改正増補英和対訳袖珍辞書』第2版第2刷、慶応3(1867)年、「豹駝【獣ノ名、豹駝】」

後述するように、この改正増補における「豹駝」訳字がこれ以後、英和対訳辞書から消える(54)藤岡勝二『大英和辞典』昭和7(1932)年までほぼ70年以上も使われている⁵。2.3.2節で述べたように、「豹駝」は、19世紀頃に中国で使用されていた漢語で、ギリシャ語に由来する‘camelopardalis’「駝+豹」を意識したものである。このギリシャ語由来の合成語から見れば、「駝豹」とするのが妥当であろうが、この時代もそれ以後も「駝豹」とする英和対訳辞書はなく、「豹駝」という漢字順で表記するのが一般的である。4)は、厳密には英和対訳辞書ではないが、巻末に「英和の部」があるので取り上げてみた。

4) J. C. ヘボン『和英語林集成』初版、慶応3(1867)年、「[見出し語なし】【無】」

‘giraffe’ ‘camelopard’ いずれの見出し語は見当たらない。ただし、「和英の部」には‘Kirin’の項があり、「麒麟 A fabulous animal, said not to tramp on live insects or to eat live grass」とでていっている。その語釈から判断すると、ジラフではなく想像上の動物としての麒麟を指しているのは明らかである。

次に、明治最初期の英和対訳辞書を検討してみよう。5)から7)は先に触れた『英和対訳袖珍辞書』の流れを汲む辞書である。いずれも豹駝のようにルビを付しているのが特徴である。

5) 薩摩学生『和訳英辞書』初版、明治2(1869)年、「^{ヒョウダ}豹駝【^{ヒョウダ}豹駝(亞国ニ産スル獣)】」

6) 前田正毅・高橋良昭『大正増補和訳英辞林』第2版、明治4(1871)年、「^{ヒョウダ}豹駝【^{ヒョウダ}豹駝(亞国ニ産スル獣)】」

7) 荒井郁『英和対訳辞書』明治5年、「^{ヒョウダ}豹駝【^{ヒョウダ}豹駝(亞国産ノ獣)】」

⁵ただし、藤岡は、「豹駝」ではなく「豹駝」の漢字を当てている。

また、‘camelopard’については、訳語は前例を踏襲しているのは明らかだが、「亞国ニ産スル獸」と注釈を加えている。動物の特徴までは解説していないものの、「アフリカ産の動物」としているのは大きな進歩である。8)には、初版と同様にいずれの見出し語も確認できない。

8) J. C. ヘボン『和英語林集成』第2版、明治5(1872)年、[無]【無】

ただし、「和英の部」の‘Kirin’の項に、「キリン 麒麟 A fabulous animal, said not to tramp on live insects or to eat live grass, unicorn. — mo oi-nureba roba ni otoru, (prov.)」とあり、初版にはない解説が見える。‘unicorn’が追加されている上、「麒麟も老いぬれば駑馬に劣る」という諺も取り上げている。ただし、‘roba’（驢馬）は、‘doba’（駑馬）の誤りであろう。

次の辞書は、和訳の後に○印を付して漢名を同時に掲出するのが特徴の辞書である。和訳は「豹駝」で、漢名は「鹿豹」である。

9) 吉田賢輔『英和字典』明治5(1872)年、「豹駝○鹿豹【無】」

2節で検討したように、中国では、「麒麟」「駝牛」「徂蠟」「駝豹」「豹駝」「長頸鹿」が使用されていたが、「鹿豹」は、あまり文献には登場しない。そこで、和暦で言えば天保15年、西暦1844年に中国マカオで出版された S. Wells Williams による *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect*、漢名『英華韻府歴階』を調べてみた。すると、‘camelopard’の見出し語はないが、‘giraffe’の項では、「鹿豹 lu páu」とある。わが国で刊行された同辞書の和訳版である維爾士維廉士 (S. W. Williams) 原著・柳澤信大校正訓点『英華字彙』、明治2(1870)年、松莊館翻刻蔵版でも、やはり‘giraffe’が「鹿豹」と出ている。『英和字典』の編訳者・吉田賢輔は、これらのいずれかを参考にして「鹿豹」という漢訳語を当てたものであろう。

明治6(1873)年には異色の辞書が刊行された。10)は、‘giraffe’には「豹駝」を、‘camelopard’には「駝馬」と図(図5を参照)と詳しい動物の特徴解説を与えている。

10) 柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』初版、明治6(1873)年、豹駝(駝馬: 図) 獸類中ニテ最モ長高キ獸ナリ木葉幼枝ヲ食ス】

この柴田・子安辞書の語釈で重要なのは、‘camelopard’の語釈である。訳語は「駝馬」となっているが、挿図から明らかにジラフを指しており、「獸類中ニテ最モ長高キ獸ナリ木葉幼枝ヲ食ス」と、ジラフの形体的特徴や食性まで踏み込んだ解説を記している。英和対訳辞書にジラフの図があるのは筆者が知る限り、この辞書が初めてである(図5)。

11)は、訳語がすべて仮名で表記されている。仮名訳語の後に、正確さは欠くが「アフリカのラクダ」と付記しているところが興味深い。これまでの英和対訳辞書と異なり、‘camelopard’の見出し語はない。

11) 青木輔清『英和掌中字典』明治6(1873)年、「ヒヨウダ(アフリカ)ノラクダ【無】」

12) 天野芳次郎蔵版『稟准和訳英辞書』明治6(1873)年、「ヒヨウダ【豹駝(亞国ニ産スル獸)】」

13) 岸田吟香『和訳英語聯珠』明治6(1873)年、「ヒヨウダ【豹駝(亞国ニ産スル獸)】」

14) 大屋愷・田中正義・中宮誠之『広益英倭字典』明治7(1874)年、

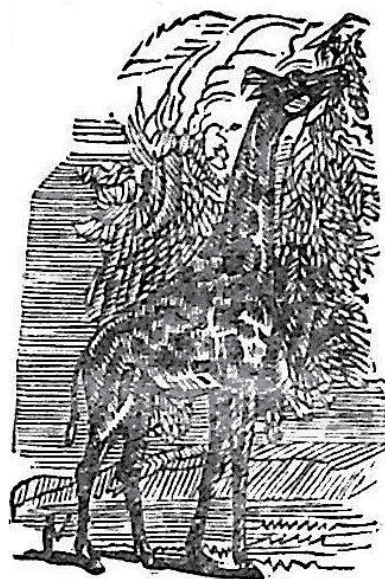


図5 柴田・子安辞書(1873年)の図

「^{ヒヤウダ}豹駝^{ヒヨウ}【^{ケモノ}豹駝（亞國ニ産ノ獸）】」

12) から 14) は、1) から 3) の『英和对訳袖珍辞書』を継承する辞書で、内容は、訳語及び解説とも 5) 6) とまったく同じである。ただし、13) の岸田吟香の辞書は、見出し語に発音を表記しているのが特徴で、‘giraffe’には「ヂレフ」と、‘camelopard’には「ケメロパアルド」とルビを附っている。ちなみに、「駱駝ラクダ」の‘camel’には「カアメル」とルビを附っている。

次の 15) は、10) の増補訂正第 2 版である。初版と同様に、漢字音訳を与えて、‘camelopard’の付記にジラフの形体と食性と同時に、「支那人ノ所謂麒麟ニ似タリ」と記している。

15) 柴田昌吉・子安峻『増補訂正英和字彙』第 2 版、明治 15 (1882) 年、「豹駝、“^{ヂラフ}叻拉啡^シ【^{ケモノ}駝馬：(図) 獸類中最モ長高キ者ニシテ支那人ノ所謂麒麟ニ似タリ木葉幼枝ヲ食トス】」

2.3.4 節で触れたように、幕末に福沢諭吉ら幕府の派遣団がロンドンで生きたジラフを見て、それを「ジラーベ」、漢字で「之獵獅」としていた。柴田・子安は、福沢らの音訳ではなく「^{ヂラフ}叻拉啡」を採用している。柴田・子安が訳出に参考にしたと言われる（遠藤, 1991）W. Lobscheid の『英華字典』慶応 3 (1867) 年に由来するものと考えられる。実際、W. Lobscheid, *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation*. Honkong: Daily Press. 『英華字典』を見ると、「Giraffe, ^{ヂラフ}叻拉啡獸 Chí la fi sháu.」となっており、さらに、ロプスチード原著・井上哲次郎訂増『訂増 英華字典』藤本次右衛門蔵版、明治 16 (1883) 年でも、やはり「^{ヂラフ}叻拉啡獸」とでている。また、「支那人ノ所謂麒麟（中国人の言う麒麟）」に似ているというのは想像上の動物としての「麒麟」ではなく、明代にのみ使用されたというジラフに当てた「麒麟」のことを指している可能性がある。

鹿鳴館時代になると数多くの辞書が刊行されるようになった。内容的には先行辞書とほぼ同じ辞書や新しい訳語が登場する辞書がたくさん世にでた。たとえば、16) は、訳語はすべて漢字表記で、内容は、同じく仮名表記の 11) と同じである。‘camelopard’の見出し語もない。

16) 西山義行編・露木精一訂正『英和袖珍字彙』明治 17 (1884) 年、「^{ヒヨウダ}ヒヨウダ（^{アフリカ}アフリカノラクダ）【無】」

17) から 22) も先行辞書を底本にして訳出されたものであろうが、いつかの特徴が見られる。

17) 棚橋一郎『英和双解字典』明治 17 (1884) 年、「^{ヘウダ}豹駝【無】」

18) 小山篤叙『学校用英和字典』明治 18 (1885) 年、「[無]【^{ケモノ}駝馬、麒麟】」

19) 市川義夫纂訳・嶋田三郎校訂『英和和英字彙大全（英和の部）】明治 18 (1885) 年、「^{ケモノ}豹駝【駝馬】」

20) 前田元敏『英和对訳大辞彙』明治 18 (1885) 年、「^{ヘウダ}豹駝^{ダバ}【^{ケモノ}駝馬（^{シヨク}獸類中ニテ最モ長高キ獸ナリ木葉幼枝ヲ食ス）】」

21) 井波他次郎『新撰新撰英辭字彙』明治 19 (1886) 年、「^{ヘウダ}豹駝、^{ケモノ}麒麟【^{ケモノ}駝馬（^{アフリカ}亞弗利加州産ニシテ獸類中最モ長高ナル者ニシテ麒麟ニ似タリ木葉ヲ食トス）】」

22) 柴田昌吉・子安峻著／天野為之訂正・鈴木重陽増補『附音図解英和字彙』第 2 版、明治 19 (1886) 年、「^{ヘウダ}豹駝、^{ケモノ}麒麟類【^{ケモノ}駝馬】」

まず、18) には、‘giraffe’の見出し語はない。‘camelopard’があつて、‘giraffe’の見出し語がない辞書は、以後に刊行されたものを含めて他にない。また、‘camelopard’の第 2 の訳語ながら、18) では「麒麟」が初めて登場する。さらに、21) の‘giraffe’訳語は注目に値する。21) は、5) や 6) の『薩摩辞書』や同郷の金沢で出版された『広益英倭字典』、10) や 15) の『英和字彙』などを巧に取り入れた工夫が見える辞書である。第 2 義ながら、‘giraffe’訳語として「麒麟（キリン）」が初めて登場する歴史的に非常に重要な辞書である。22) は、10) 15) の翻刻本ではあるが、天野と鈴木による訂正増補が行われている。英学史上では、この辞書は内容的に

は明治6年の10)『英和字彙』を翻刻した『附音図解英和字彙』小林亀之進翻刻、文学社、明治18(1885)年と同一で、「訂正増補といふのは意味をなさない」(豊田, 1939, p. 74)とされ、岩崎(1935)も以下のように述べている。

此処に一言したい事は訂正増補と云ふ語の意味である。上述の天野訂正、鈴木増補と称する文学社第二版は同社十八年版の facsimile に過ぎず、更に私の調べた処では整版、挿図の排列に於てこそ明治六年の日就社原版と多少の相違はあれ、その内容に至つては二者全く同一である。(pp. 35-63)

しかし、22)の‘giraffe’の項をみると、10)にも15)にも見られない「^{リンレイ}麟類」という訳語を与えられている。「麒麟の類」あるいは「雌の麒麟の類」という意味であろうか。いずれにしても、「^{リンレイ}麟類」という訳語を与えている辞書は稀である。

次に、ヘボンの第3版である。以下に示すように、英和の部において初めて‘giraffe’の見出し語が掲出された。訳語はヘボン式のローマ字で「Hyōda」である。漢字表記はない。

23) J. C. ヘボン『改正増補和英英和語林集成』第3版、明治19(1886)年、「Hyōda. 【無】」

なお、第2版の和英の部の‘Kirin’の項に諺が紹介され、「doba 駑馬」とすべきところを「roba 驢馬」になっていたが、第3版では、「キリン 麒麟 A fabulous animal, said not to tramp on live insects or to eat live grass; the unicorn: — mo oi-nureba doba ni otoru (prov.)」とでており、「doba」に訂正されている。

次の24)は、10)15)『英和字彙』の第3版に相当する再増訂版である。先行版と異なるのは、‘giraffe’の第2義に仮名ルビを「ギラツフ」と附っている点である。「ツ」は促音の「ッ」で、現代風に言えば「ギラツフ」と読んだのであろう。音的には現代の「ジラフ」にかなり近い。

24) 柴田昌吉・子安峻『増補訂正英和字彙』第2版再版、明治20(1887)年、「^{ヘウダ}豹駝、^{ギラツフ}“拉啡”【^{ダバ}駝馬：(凶) 獸類中最モ長高キ者ニシテ支那人ノ所謂麒麟ニ似タリ木葉幼枝ヲ食トス】」

現存するジラフは「^{シナジン}支那人ノ所謂麒麟ニ似タリ」と、ジラフと麒麟を関連づけているのは興味深い。また、‘camelopard’の項ながら、「^{コノハワカエダ}木葉幼枝ヲ食トス」としているように、ジラフの食性を記述した、おそらく最初の英和対訳辞書であろう。

この時代、以下に示すように、たくさんの英和辞書が世にでていた。それらの多くでは基本的には24)までの訳語や解説を踏襲している。しかし、29)の島田豊の辞書と30)のイーストレーキ・棚橋一郎の辞書は注目に値する。

25) 棚橋一郎・鈴木重陽『英和字海』明治20(1887)年、「^{ヒョウダ}豹駝【^{ダバ}駝馬】」

26) 酒井勉『英和対訳中文字彙』明治21(1888)年、「^{ヘウダ}豹駝【^{ヘウダ}豹駝(亞國産ノ獸)】」

27) 松村為亮『挿画訂訳英和対訳新辞林』明治20(1887)年、「^{ヘウダ}豹駝【^{ヘウダ}豹駝(亞國産ノ獸)】」

28) 高相東一纂訳・寺内章明訂正・末岡精一校閲『英和新国民大辞書』明治21年、「^{ヘウダ}豹駝【駝馬】」

29) 島田豊纂訳・曲直瀬愛校訂・杉浦重剛・井上十吉校閲『附音挿図和訳英字彙』明治21(1888)年、「麒麟、

⁶ 明治21(1888)年に刊行された柴田昌吉・子安峻著／栗野忠雄増訳・坪井九馬三校閲『附音挿図増補英和字彙』東京：中村順三郎でも‘giraffe’の訳語として「麟類」の字が見える。そこでこの辞書の訳語と天野為之訂正・鈴木重陽増補22)の訳語を比較してみると、22)のそれとほぼ一致することがわかった。例えば、‘AI’ ‘architecture’ ‘cockroach’などの訳語である。今後の調査を待たなければならないが、栗野増訳・坪井校閲本は、緒言にあるように、採録語数はWebster大辞書から1万語程度増補しているものの、訳語については訂正増補を行った22)を写し取ったか、かなりの程度参考にした可能性が高い。

豹駝（高サ二丈余ニ至ル亞弗利加産ノ動物ナリ）〔図〕【駝馬（亞弗利加産ノ）】

30) イーストレキ・棚橋一郎『ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙』明治 21 (1888) 年、「麒麟、豹駝【駝馬（亜弗利加産）】」

これまでの英和辞書では、「豹駝」を第 1 義としてあげる辞書がほとんどであったが、島田豊辞書では、「麒麟」が第 1 義として取り上げられている。‘giraffe’を「麒麟」と訳出した英和辞書の嚆矢と言えるだろう。また、‘camelopard’の項では多く見られたものの、‘giraffe’の訳語に「高サ二丈余ニ至ル阿弗利加産ノ動物ナリ」と注釈を加えた辞書はこの辞書が初めてである。なお、同じく「麒麟」を第 1 義として訳出している 30) のイーストレキ・棚橋辞書は、8 ヶ月前に出版された、この島田豊辞書を参考にしたとされる辞書である（永嶋, 1970）。

(B) 明治 22 (1889) 年 ~ 大正 14 (1925) 年

明治中期から大正にかけて、さらに多くの英和辞書が刊行されている。「豹駝」という訳語も依然として見えはするが、「麒麟」という訳語が多くの辞書で使われるようになり、大正期にはほぼ「麒麟」が一般的な訳語となる。31) は、名実共に明治を代表する英和対訳辞書である（詳しくは村端 (2020) を参照）。

31) 尺振八『明治英和字典』明治 22 (1889) 年、「麒麟（其高サ二丈余ニ至ルアリ）【駝馬（亞不利加沙漠ニ住スル長大ノ再嚼四足獣、一名之拉啡（シラフ井一）、頭ノ高サ地ヨリ十八「フート」ニ及ブ者往々之レ有リ）】」この辞書の最大の特徴は、訳語の後に詳しい解説を加えていることである。‘giraffe’と‘camelopard’の解説を総合すると、ジラフ（駝馬）はアフリカの沙漠に住んでおり、6 メートル余と背が高く、食物を反芻する 4 足の動物であるという解説になる。‘camelopard’の一名として音訳の「之拉啡」をあげているが、この名称はロプスチード原著・井上哲次郎訂増『訂増 英華字典』藤本次右衛門蔵版、明治 16 (1883) 年によったものであろう。

さらに、本節の冒頭で述べたように、この時代になると‘giraffe’‘camelopard’のいずれの第 1 義に「麒麟」という漢字が使われる傾向が強くなる。32) から 45) の辞書の訳語・訳解で特徴的なものをいくつか見てみたい。まず、32) 島田辞書では、‘camelopard’の訳語として、これまでは「駝馬」がほとんどであったが、第 1 義として「麒麟」が初めて登場している。32) の初版である 29) には「駝馬」の訳語しかみられない。また、33) では、同じく‘camelopard’の第 2 義ながらカタカナで「キリン」と表記している。なぜ漢字を使わずに「キリン」のカタカナ表記にしたのかは定かでないものの、想像の域をでないが中国の想像上の動物とされる「麒麟」と区別する目的が背景にあったのかもしれない。

32) 島田豊纂訳・曲直瀬愛・松下丈吉校正・杉浦重剛校閲『訂正増補和訳英字彙』明治 23 (1890) 年、「麒麟、豹駝（高サ二丈餘ニ至ル亞弗利加産ノ動物ナリ）〔図〕【麒麟、豹駝】」

33) 棚橋一郎編・末松謙澄校『新訳無双英和辞書』明治 23 (1890) 年、「豹駝【駝馬、キリン（図）獸類中ニテ最モ長高キ獸ナリ木葉ノ幼枝ヲ食ス】」

34) イーストレキ・棚橋一郎『英和袖珍新字彙』明治 25 (1892) 年、「豹駝、麒麟【麒麟】」

35) 島田豊纂訳・珍田捨己校閲『双解英和大辞典』明治 25 (1892) 年、「麒麟、豹駝【A ruminant, long-necked, African quadruped; the giraffe. (動) 駝馬（亞非利加地方ニ産スル長頸ノ獸ニシテ漢土ニ所謂麒麟ノ類カ）】」

36) イーストレキ・岩崎行親・棚橋一郎・中川愛咲・秋保三郎『英和新辞林』明治 27 (1894) 年、「麒麟、豹駝 図 [Giraffe] 【麒麟】」

- 37) 中澤澄男・山中鉦太郎・比企忠・島田豊『英和字典』明治30(1897)年、「麒麟、豹駝【麒麟、豹駝】」
 38) イーストレキ・島田豊『学生用英和字典』明治31(1898)年、「麒麟、豹駝【駝馬、麒麟】」
 39) 島田豊・島田弟丸『袖珍学生用英和辞典 羅馬字訳語附』明治33(1900)年、「Kirin, hyoda. 麒麟、豹駝【麒麟】」
 40) 和田垣謙三『新英和辞典』明治34(1901)年、「麒麟、豹駝 [図] 【麒麟、豹駝】」
 41) 神田乃武他『新訳英和辞典』明治35(1902)年、「麒麟 図 [Giraffe] 【麒麟】」
 42) 上田萬年・上田敏『最新英和辞典』明治36(1903)年、「麒麟【麒麟】」
 43) 和田垣謙三・榊原彌『新訳英和双解辞典』明治43(1910)年、「The camelopard, an African quadruped, whose very long fore legs make it the tallest of animals, sometimes twenty feet in height, 麒麟【The giraffe, 麒麟】」
 44) 神田乃武他『模範英和辞典』明治44(1911)年、「^{キリン}麒麟、^{ヘウダ}豹駝【^{キリン}麒麟、^{ダヘウ}駝豹】」
 45) 入江祝衛『詳解英和辞典』明治45(1912)年、「麒麟【麒麟】」

また、35)の‘camelopard’の記述が特徴的である。アフリカに現存する動物としての「駝馬」と中国の想像上の動物「麒麟」の類を同一視したような記述である。この頃は、まだジラフがわが国に渡来していない時代なので止むを得ない面もあるかもしれない。

大正時代に入ると、英和对訳辞書は百科事典的な色を帯びるようになってくる。この時期に刊行された辞書の訳語、訳解を見てみよう。

- 46) 増田藤之助『新撰英和辞典』大正2(1913)年、「①(動)麒麟、豹駝。②星座ノ名。③(米)鑛山用籃状車。【麒麟】」
 47) 上田萬年・上田敏『正訳英和新辞典』大正2(1913)年、「麒麟【麒麟】」
 48) 井上十吉『井上英和大辞典』大正4(1915)年、「①(動) ^{キリン}麒麟、ジラフ。②星座の名。③(米)鑛用用籃状車[ママ]。【^{キリン}麒麟】」
 49) 斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』大正4(1915)年、「麒麟【見出し語なし】」
 50) 神田乃武・新渡戸稲造・頭本元貞『新々英和辞典』大正5(1916)年、「^{キリン}麒麟、^{ヘウダ}豹駝 [図] 【^{キリン}麒麟、^{ヘウダ}豹駝】」
 51) 熊本謙二郎・南日恒太郎『袖珍英和辞典』増補改訂版、大正8(1919)年、「麒麟、豹駝【麒麟】」
 52) 藤岡勝二『大英和辞典』(第一卷 A-L) 大正10(1921)年、「①^{キリン}麒麟、豹駝、ジラフ ②(天)麒麟星座。③十八世紀ニ用井夕眞直ナ小琴。④(病)電僞病、 Dengue 熱 (dengue 参照)。⑤(U.S.) (鑛山) 一端ガ他端ヨリ高イ籠形ノ車。giraffe-camel あめりか合衆国 Wyoming 州 White River 河床カラ出夕駝駝ノ化石 (頭ト脚トガ長イノデイフ)。Giraffe-fever (病) = giraffe ④。Giraffine ①(形)麒麟ノヤウナ、ジラフニ似タ。②(名)麒麟ニ似タ動物。【麒麟】」
 53) 神田乃武・金澤久『袖珍コンサイス英和辞典』大正11(1922)年8月、「麒麟、豹駝【麒麟、駝豹】」
 54) 斎藤秀三郎『携帯英和辞典』大正11年(1922)年、「^{キリン}麒麟【(= giraffe) ^{キリン}麒麟】」
 55) 三省堂編輯所『新明解英和辞典』大正14(1925)年、「じらふ、^{キリン}麒麟【無】」

まず目を引くのは、44)と53)の神田乃武が関わった辞書の‘camelopard’に対する訳語である。これまでの多くの辞書では、2)の『改正増補英和对訳袖珍辞書』慶応2(1866)年の訳語である「豹駝」、「豹のような斑点をもつ駝」の意を直接的、間接的に踏襲してきたものを、ここでは「駝」と「豹」を入れ替えて、「駝豹」としている。この訳語は、濁音で始まるので多少音声的に違和感を覚えることもないわけではないが、‘camel’と‘leopard’の合成語としての原語構成を忠実に反映したものと考えられる。他の辞書にはあまり見られない訳語である。次に、46)増田藤之助『新撰英和辞典』大正2(1913)年では、動物や星座の他にアメリカの鉱山で使用される鉱山用の「籃状車」をあげている。筆者には、それがどのようなものかは不明ながら、

ジラフのように、おそらく頸の長い重機を指しているのであろう。また、52) の藤岡大英辞典では Dengue 熱やジラフの化石、'giraffe' の形容詞形に至るまで、さらに詳しい情報がみられる。もう 1 つ注目したいのは、55) の三省堂の辞書である。この辞書には、'camelopard' の見出し語はない。幕末は文久 2 (1862) 以来の英和対訳辞書あるいは和英・英和対訳辞書において、この見出し語がない辞書は、4) のヘボン『和英語林集成』慶応 3 (1867) 年以外はない。この事態は単なる偶然ではない。'camelopard' が昭和時代に入り、徐々に古語、廃語の色を帯びて徐々に英和対訳辞書から姿を消していく予兆とも言えるからである。もう 1 つ重要な点は、48) や 52) もそうであるが、'giraffe' に「じらふ (ジラフ)」という仮名音訳を与えていることである。この表記法も昭和期に入ってより広く使用されるようになる。そして最後に 52) の「豹駄」の漢字に注目していただきたい。編訳者である藤岡勝二は「駝」ではなく「駄」を使用している。意味的には「駝」は駱駝類を、「駄」は下等な馬を指す「駄馬」に使用されるように馬類を、それぞれ指すと考えられる。藤岡は 'giraffe' を馬類とみたのか、あるいは何か別の理由があったのか。いずれにしても「豹駄」という訳字は後にも先にもこの辞書だけである。

(C) 昭和 2 (1927) 年 ~ 昭和 24 (1949) 年

次に昭和前期の訳語、語釈の変遷を検討してみよう。この時期の大きな特徴は 6 点ある。まず、'giraffe' の仮名音訳「ジラフ (じらふ)」が広く使われている。2 点目は、「麒麟」を用いる場合、「麒麟」のように仮名でルビを附る傾向にある。3 点目は、59) や 67)、72) のように、'giraffe' を麒麟とするのは俗称であり、62) の「(稀) 麒麟。[備考] 現時ハ通常 giraffe ノヲ方用キル」のように、'camelopard' は通例では 'giraffe' を使用して稀に「麒麟」と呼ばれる、という注記がみられる。4 点目は、百科事典的な特徴をもった辞書が多くみられ、56) や 57)、61) のように、多様な語義を取り上げているものや 61)、64)、68) のように、訳語の提示のみならず詳細な説明を加えているものも多くみられる。5 点目は、昭和 10 年以後になると、63) や 64) のように 'camelopard' の見出し語を採録しない辞書が散見される。6 点目は、語学的特徴を備えた英和辞書が登場することにより、56) や 60) の岡倉辞書に代表されるように、'giraffe' はアラビア語に由来するなど、語源や英語に伝来した経路を示す辞書が増えているのが目を引く。

56) 岡倉由三郎『新英和大辞典』昭和 2 (1927) 年、「(動) 麒麟、ジラフ (camelopard とも云ふ) ; (天) 麒麟星座; (米) 鑛山用籃状車。[Arab. zarifah] [[kəmɛlɔpɑ:d, kɑemilə-] 麒麟 (今では通例 giraffe)。[L<Gk camēopardalis]]」

57) 三省堂編輯所『三省堂英和大辞典』昭和 3 (1928) 年、「① (動) 麒麟。([giraffe ①]) ② (天) =Camelopard. ③ (採) 斜坑捲揚臺;(地表ノ) 傾車装置;階段附卷揚函。[F., <Ar. zarāf]。【(稀) 麒麟】」

58) 井上十吉『井上英和中辞典』増補版、昭和 4 (1929) 年、「麒麟 (キリン)、ジラフ 𠬪 [giraffe] 【麒麟】」

59) 石川林四郎『最新コンサイス英和辞典』昭和 4 (1929) 年、「じらふ (俗称 麒麟) 【(稀) じらふ (俗称、麒麟普通 giraffe ヲ用フ)】」

60) 岡倉由三郎『新英和中辞典』昭和 4 (1929) 年、「麒麟。[アラビヤ語] 【麒麟 (今では通例 giraffe)。[L<Gk<camēopardalis]]」

61) 市河三喜・畔柳都太郎・飯島広三郎『大英和辞典』昭和 6 (1931) 年、「① (動) 麒麟。② (天) 麒麟 (星座) ③ (米) 傾斜路に使用する一種の籃状車両。④ (醫) 熱帯熱 (Tropical fever); 骨痛熱 (Dengue)。【麒麟 (Giraffe)】」

62) 三省堂編輯所『センチュリー英和辞典』昭和 8 (1933) 年、麒麟 【(稀) 麒麟。[備考] 現時ハ通常 giraffe

ノ方ヲ用キル】」

- 63) 研究社辞書部『スクール英和新辞典』改訂増補版、昭和8(1933)年、「麒麟^{きりん}【無】」
- 64) 三省堂編輯所『学生英和辞典』昭和10(1935)年、「ジラフ、麒麟^{きりん}。☞アフリカ南部に産する草食の哺乳動物。頭までの高さ六米に達するものがある。図 [giraffe] 【無】」
- 65) 岡倉由三郎『新英和大辞典』第2版、昭和11(1936)年、「ジラフ、麒麟^{きりん}(=camelopard) 【1】(稀) 麒麟^{きりん}(通例 'giraffe' と云ふ) 2] [kæmel lépəd] (俗) 麒麟みたいな人(痩せすぎでのっぼの女)。】」
- 66) 島村盛助・土居光知・田中菊男『岩波英和辞典』昭和11(1936)年、「麒麟^{きりん}【無】」
- 67) 石川林四郎『最新コンサイス英和辞典』新訂版、昭和13(1938)年、「じらふ〔俗称麒麟〕【じらふ〔俗称麒麟普通 giraffe ヲ用フ〕】」
- 68) 三省堂編輯所『クラウン英和辞典』昭和14(1939)年、「ジラフ、きりん。☞アフリカ南部に産する草食の哺乳動物。頭までの高さが6米に達するものがある【無】」
- 69) 研究社辞書編集部『スクール英和新辞典』昭和15(1940)年、「麒麟^{きりん} 図 [Giraffe] 【無】」
- 70) 澤村寅次郎『常用基本簡易英和辞典』昭和16(1941)年、「麒麟^{きりん} 【無】」
- 71) 岩崎民平『簡約英和辞典』昭和16(1941)年、「ジラフ、麒麟^{きりん} 【(稀) 麒麟^{きりん} (今は giraffe)】」
- 72) 旺文社『英和掌中辞典』昭和16(1941)年、「ジラフ(俗に麒麟) 【(稀) 麒麟 (cf. giraffe)】」
- 73) 齋藤静『双解英和辞典』昭和19(1944)年、「麒麟 (camelopard) 【麒麟 (giraffe)】」
- 74) 岩崎民平『ポケット英和辞典』昭和22(1947)年、「ジラフ、麒麟^{きりん} 【①(稀) 麒麟^{きりん} (今は giraffe) ②(滑稽) 痩せてのっぼの女。】」
- 75) 市河三喜『新英和小辞典』昭和24(1949)年、「ジラフ【無】」
- 76) 島村盛助・土居光知・田中菊雄『岩波英和辞典』新增訂版、昭和26(1951)年、「麒麟^{きりん} 【無】」
- 76) 研究社辞書部『スクール英和新辞典』改訂増補版、昭和27(1952)年、「麒麟^{きりん} 図 [Giraffe] 【無】」

この期で取り上げた22本の辞書の中で、「giraffe」に対して「麒麟」と漢字にルビを附る辞書は13本、「ジラフ(じらふ)」の仮名訳語を当てる辞書は半数の11本である。したがって、昭和前期は、いわば「麒麟^{きりん}」から「ジラフ」への移行期とすることができるだろう。最後に、この期の特徴を1つ付言しておく、56)や57)の鉾山で使用する重機や61)の Deng 熱の他に、65)と74)の 'camelopard' の語釈にみられる「(俗)麒麟みたいな人(痩せすぎでのっぼの女)」「(滑稽) 痩せてのっぼの女。」という比喩的な俗称がみられる。なお、厳密な意味では英和対訳辞書ではないが、「giraffe」にもう1つの比喩的な意味を採録しているものがある。齋藤(1949)の『米語辞典』三省堂がそれである。以下の記述がみえる。

Giraffe, 【学生】男又は女と抱き合つて愛撫ばかりしている奴、頸にかじりついてばかりいる奴 (= person who indulges in necking)。

【学生】と注記しているので、米国の学生間で使用される、いわばスラングに分類される用例と言えるだろう。頸の長いキリンをプロトタイプとする語彙的拡張の結果として生じた、認知言語学的視点から見ても大変興味深い事例である。

(D) 昭和28(1953)年～昭和56(1981)年

昭和後期では、どのような訳語、語釈の特徴がみられるだろうか。以下の例をみると一目瞭然ながら、「giraffe」の音訳「ジラフ」を第1訳語としている辞書が多い。また、漢字「麒

麟」を避けて「きりん」あるいは「キリン」と仮名表記にしている。さらに、「きりん キリン」というのは俗称であることを明記している辞書が増えているのが特徴である。一方、‘camelopard’の訳語は、「今では giraffe」のように、この語はあるいは古称、廃語で、この時期にいたってはあまり使われない語という表記も頻繁にあらわれ、徐々に見出し語からも外される傾向が強くなっている。

- 77) 岩崎民平・河村重次郎『新英和大辞典』第3版、昭和28(1953)年、「ジラフ、〔俗〕きりん (*Giraffa camelopardalis*) 【①(天文) きりん座(カシオペアと大くま座の中間にある北天の星座)。②(まれ) = giraffe ③(戯言)(きりんのような) やせすぎでのっぼの女 [LL *camelopard-us*, L *camelopardalis*, Gk *kamelopardalis giraffe*: cf. *camel*, *pard*]]」
- 78) 井上義昌『英和双解新辞典』昭和31(1956)年、「きりん、ジラフ (a horse-like animal with a very long neck, long legs and a spotted skin)。【無】」
- 79) 岩崎民平『新簡約英和辞典』昭和31(1956)年、「ジラフ、(俗称) きりん【きりん(今通例 giraffe)】」
- 80) 福原麟太郎『新スクール英和辞典』昭和32(1957)年、「ジラフ、きりん(麒麟【無】)」
- 81) 島村盛助・土居光知・田中菊男『新版岩波英和辞典』昭和33(1958)年、「ジラフ、きりん【きりん(今では giraffe という)】」
- 82) 三省堂編修所『最新明解英和辞典』昭和34(1959)年、「じらふ、^{キリン}麒麟【無】」
- 83) 大塚高信・吉川美夫・河村重治郎『カレッジクラウン英和辞典』昭和39(1964)年、「ジラフ、(俗に) きりん。 [F. < Span. *girafa* < Arab. *zarāfah*] 【キリン (giraffe) [Gk, *kamēopardālis* (*kamēlos* camel + *pardālis* panther)]]」
- 84) 佐々木達『最新コンサイス英和辞典』第10版、昭和41(1966)年、「ジラフ [俗称キリン] 【(C) [天] きりん座 [Camelopardalis ともいう。]】」
- 85) 三省堂編修所『三省堂小(ヴェストポケット)英和』昭和46(1971)年、「ジラフ (俗称 キリン) 【キリン、ジラフ (紋章では長い角がある)】」
- 86) 河村重治郎『初級クラウン英和辞典』第4版、昭和46(1971)年、「ジラフ、(俗に) キリン【無】」
- 87) 三省堂編修所『新明解英和中辞典』昭和47(1972)年、「キリン【無】」
- 88) 竹林滋・小島義郎『ユニオン英和辞典』昭和47(1972)年、「ジラフ、きりん【無】」
- 89) 岩崎民平『現代英和辞典』昭和48(1973)年、「ジラフ、きりん【(古) きりん (giraffe)】」
- 90) 中島文雄『英和大辞典』昭和50(1975)年、「ジラフ、きりん【(まれ) きりん (giraffe)】」
- 91) 旺文社『英和中辞典』昭和50(1975)年、「ジラフ、きりん【(廃) きりん (giraffe)】」
- 92) 佐々木達『新コンサイス英和辞典』昭和50(1975)年、「ジラフ【(古) = giraffe】」
- 93) 川本茂雄『英和辞典』昭和54(1979)年、「ジラフ (俗称キリン) 【(稀) キリン】」
- 94) 小西友七・安井稔・國廣哲彌『プログレッシブ英和中辞典』昭和55(1980)年、「ジラフ、キリン【(古) = giraffe】」
- 95) 稲村松雄・渡辺藤一・荒木一雄『新撰英和辞典』昭和56(1981)年、「ジラフ、キリン【無】」
- 96) 中島文雄・忍足欣四郎『岩波新英和辞典』昭和56(1981)年、「きりん、ジラフ【①(古) きりん ②(紋)(長い曲った角で表される) きりんの紋章】」

この時期の英和対訳辞書は、語学をより重視するものが一層増加しているので、77) や 83) のように、語源的には、‘camelopard’は‘camel’と‘pard’‘panther’の合成語であることを詳しく明記しているものもある。また、85) や 96) のように、‘camelopard’の使用域として「紋章」をあげているのが特徴的である。

(E) 昭和 59 (1982) 年 ~ 令和 2 (2020) 年

昭和最終期から現代 (令和) までに刊行された辞書における訳語の特徴は次の通りである。まず、22 本のうち、仮名 (きりん、キリン) を第 1 訳語としているのは半数を超える 14 本で、115) から現在までは仮名のキリンのみである。音訳のジラフを第 2 訳語としているのが半数弱の 10 本であるが、きりん (キリン) に一本化されて徐々にその姿を消しつつあるのが特徴である。

- 97) 竹林滋・小島義郎『ライトハウス英和辞典』初版、昭和 59 (1984) 年、「キリン、ジラフ【無】」
- 98) 佐々木達・木原研三『新コンサイス英和辞典』第 2 版、昭和 60 (1985) 年、「ジラフ【(古) = giraffe】」
- 99) 小稲義男・山川喜久男・竹林滋・吉川道夫『新英和中辞典』第 5 版、昭和 60 (1985) 年、「キリン、ジラフ【無】」
- 100) 小西友七『ジーニアス英和辞典』昭和 63 (1988) 年、「キリン、ジラフ【① (古) キリン (giraffe) ② (紋章) (盾などの) キリンに似た紋章。】」
- 101) 宮部菊男・杉山忠一『ロイヤル英和辞典』平成 2 (1990) 年、「ジラフ、きりん【無】」
- 102) 小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明『ラーナーズプログレッシブ英和辞典』平成 4 (1992) 年、「ジラフ、キリン。▶本来、キリンは古代中国の想像上の獣。【無】」
- 103) 木原研三・福田虎治郎『新グローバル英和辞典』平成 6 (1994) 年、「キリン、ジラフ【無】」
- 104) 川本茂雄・岡田秀穂・森常治・森田貞雄『英和中辞典』平成 6 (1994) 年、「ジラフ (俗称キリン)【(稀) キリン】」
- 105) 河村重次郎『新クラウン英和辞典』第 5 版、平成 7 (1995) 年、「ジラフ、(俗に) キリン【無】」
- 106) 竹林滋・小島義郎・東信行『ルミナス英和辞典』平成 14 (2002) 年、「きりん【無】」
- 107) 竹林滋・小島義郎・東信行・赤須薫『ライトハウス英和辞典』第 4 版、平成 14 (2002) 年、「きりん、ジラフ【無】」
- 108) 竹林滋『新英和大辞典』第 6 版、平成 14 (2002) 年、「① (動) キリン、ジラフ (*Giraffa camelopardalis*)。② (天文) きりん (麒麟) 座 (*Camelopardalis*) giraffish. (16C) — F *girafe* — It. *giraffa* — Arab. *zarafa*^h. ∞ (1594) *giraffa* — It.【(古) キリン (giraffe)】」
- 109) 竹林滋・東信行・諏訪部仁・市川泰男『新英和中辞典』第 7 版、平成 15 (2003) 年、「キリン、ジラフ【(古) キリン】」
- 110) 八木克正『ユースプログレッシブ英和辞典』平成 16 (2004) 年、「ジラフ、キリン【無】」
- 111) 野村恵造『コアレックス英和辞典』平成 17 (2005) 年、「ジラフ、キリン【無】」
- 112) 花本金吾・野村恵造・林龍次郎『オーレックス英和辞典』平成 20 (2008) 年、「ジラフ、キリン【無】」
- 113) 竹林滋・東信行・赤須薫『ライトハウス英和辞典』第 6 版、平成 24 (2012) 年、「きりん、ジラフ【無】」
- 114) 井上永幸・赤野一郎『ウィズダム英和辞典』第 3 版、平成 25 (2013) 年、「きりん、ジラフ【無】」
- 115) 南出康世『ジーニアス英和辞典』第 5 版、平成 26 (2014) 年、「キリン【(紋章) (盾などの) キリンに似た紋章】」
- 116) 井上永幸・赤野一郎『ウィズダム英和辞典』第 4 版、平成 25 (2013) 年、「キリン【無】」
- 117) 田島信悟『初級クラウン英和辞典』第 13 版、平成 29 (2017) 年、「キリン【無】」
- 118) 投野由紀夫『エースクラウン英和辞典』第 3 版、令和 2 (2020) 年、「キリン【無】」

一方、'camelopard' については古語あるいは廃語という傾向が一層強くなり、見出し語としても見られないものが多い。見出し語として採録されていても 115) のように動物ではなく、キリンに似た紋章とされている。キリンの語釈として注目すべきは 102) の辞書である。「本来、キリンは古代中国の想像上の獣。」と解説している。前期では、キリンは俗称であることを表記しながらも、そもそもキリンというのは何を意味するかについては触れられていなかった。

5. まとめと結論

本稿では、アフリカ原産の動物ジラフとはどのような動物で、世界各地にいつ頃どのように伝播していったのか、そして中国やわが国でいうところの麒麟とは何か、これらについてまず検討した。その上で、わが国で刊行された英和対訳辞書では‘giraffe’ (‘camelopard’) をどのように訳出されてきたのかを 118 本の英和対訳辞書をもとに、その訳語変遷について検討してきた。図 6 は、英和対訳辞書における‘giraffe’の訳語変遷を大まかに示したものである。

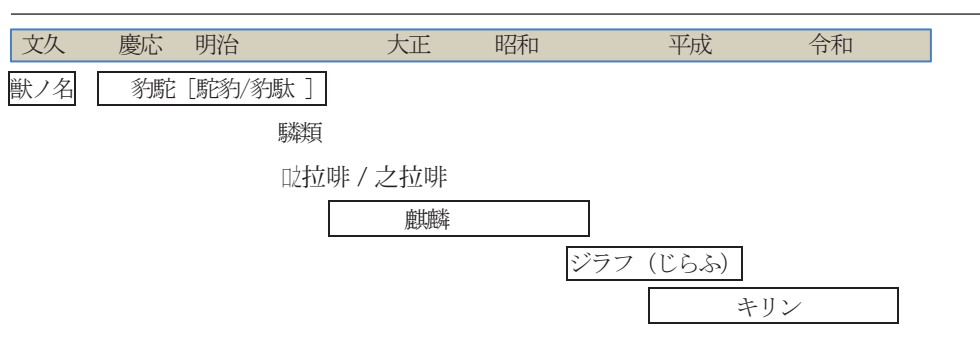


図 6 英和対訳辞書における‘giraffe’訳語の変遷

まず正体不明の獣を指す、文久年間の「獣ノ名」に始まり、‘camelopard’由来の「豹駝」が早くも慶応年間に登場する。そして豹駝は明治期の主な訳語として使用されている。明治年間では、「麟類」や音訳の「𪛗拉啡 / 之拉啡」も一時期使用されたが、いずれも定着しなかった。明治期後半からは豹駝と麒麟は区別すべきでジラフを麒麟と呼ぶべきではないとする国語界からの注意にも関わらず世間では現存する動物を麒麟と呼ぶ慣習が一般的で、英和対訳辞書においても「麒麟」という訳語は豹駝に次ぐ第 2 訳語として使用され始めた。「麒麟」訳語は、しだいに市民権を得て昭和初期まで第 1 訳語として英和対訳辞書に位置づけられている。

この「豹駝」から「麒麟」への移行の要因については、1 つには、明治初期から国内の学校で広く使用された学習教材、例えば、『博物懸圖 動物第一 獣類一覽』文部省明治 6 (1873) 年にはジラフの図と共に「麒麟」の字が添えられており、これが「麒麟」が定着する 1 つのきっかけとなった可能性がある。もう 1 つの可能性は、明治 40 年に上野動物園にジラフが到着し、大人気を博したことが要因となったと考えられる。ジラフの輸入に貢献した石川千代松は、ジラフを「麒麟」と命名した人物ではない可能は高いが、麒麟と名づけられていた珍獣をわが国の動物園に迎え入れて国民に広く観覧の機会を与えたという意味では重要な人物である。

その後、昭和に入ると、漢字の「麒麟」は現存の動物ジラフとは異なるので俗称として扱うべきという学問的な見地からか、音訳仮名の「ジラフ」が登場する。しかし、一度国民の間に定着した「麒麟」は、ジラフよりも親しみやすいという理由からか、再登場することになる。ただし、以前と異なるのは、漢字ではなく「キリン きりん」の仮名表記である。これは、漢字を動植物名に当てると、漢名と国字名において違う植物なのに同じ漢字を使う場合のように混乱を生じてしまう (例えば、鮎 [うなぎ] と鮎 [あゆ]) ことがあるため、動植物名はすべて仮名表記にすべきとした植物学者・牧野富太郎の提言 (村端, 2006) を受けたものであろう。その後、今日に至るまで、一貫して仮名表記の「キリン」あるいは「きりん」が使われている。

以上、英和対訳辞書における ‘giraffe’ 訳語の変遷について考察してきた。図 6 に示す変遷過程が極めて詳細に明らかにできたことは大きな成果であろう。しかし、課題もいくつか残された。まず、上のまとめでも述べたが、「麒麟」の定着に大きな役割を果たした 1 つが上野動物園であった可能性はあるものの、「豹駝」から「麒麟」への移行、つまり現存する動物に「麒麟」の字を与えた主たる要因が定かではない。今後の更なる調査で明らかになることを期待したい。第 2 に、今回の英和対訳辞書の調査で偶然にも明らかになったことだが、実存しない古代中国の想像上の動物の「麒麟」が大正 4 (1915) 年頃から英語圏の辞書及びわが国の英和辞書において、‘Kylin’ ‘Kilin’ ‘Qilin’ ‘Chilin’ (‘Kylin’ 綴りが最も一般的) などのように英語語彙 (見出し語) の 1 つとして採録されるようになってきている。ある英語辞書では ‘a unicorn of Chinese myth depicted with tail of an ox and the legs and body of a deer’ のように、そして、日本の代表的な英和辞書では「陶器や磁器に描かれたた中国の想像上の動物」などのような語釈が与えられている。英米やわが国などで刊行されている英語辞書や英語文献などにおける、この英語語彙化した ‘Kylin’ の語義、語釈の発展過程を明らかにすることも今後の課題である。

参考文献

- 荒川惣兵衛 (1967). 『外来語辞典』 角川書店.
- 石上阿希 (2020). 『江戸のことは絵事典』 角川選書、角川書店.
- 和泉雅人 (2002). 「麒麟考試論: 麒麟表象の淵源をめぐる考察」『慶応義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』 (慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会)、第 34 号、1-23 (104-82).
- 伊地知善継 (2002). 『中国語辞典』 白水社.
- 市川清流著・楠家重敏編訳 (1992). 『幕末欧州見聞録 一尾蠅欧行漫録一』 新人物往来社.
- 岩切正介 (2006). 「カステッロ荘 Villa di Castello —コジモ一世の水と愚意の庭、そして用—」『帝京国際文化』 帝京大学、第 19 号、25-57.
- 岩崎克己 (1935). 『柴田昌吉伝』 東京：一誠堂書店.
- 上田萬年・高楠順次郎・白鳥庫吉・村上直次郎・金澤庄三郎 (1915). 『日本外来語辞典』 三省堂.
- NHK (2016). 「あしたは動物園に行こう」歴史秘話ヒストリア SP、4月29日(金)放送.
- 遠藤智比古 (1991). 「「キリン」の訳語考」『英学史研究』 (日本英学史学会)、第 23 号、41-55.
- 大槻文彦 (1904). 『言海』 (縮刷版) 富山房.
- 大槻文彦 (1932). 『大言海 あ—き』 富山房.
- 大槻文彦 (1933). 『大言海 く—す』 富山房.
- 大槻文彦 (1934). 『大言海 せ—は』 富山房.
- 大槻文彦 (1935). 『大言海 ひ—を』 富山房.
- 王圻・王思義 (1609). 『三才図会』 国立国会図書館蔵、近代デジタルライブラリー.
- 川端夕貴 (2011). 「中国資料に見られる“麒麟”の一考察」『東洋史訪』 東洋史研究会、2-22.
- 金田一春彦・池田弥三郎 (1978). 『学研国語大辞典』 学習研究社.
- 倉石武四郎 (1963). 『中国語辞典』 東京：岩波書店.
- 小宮輝之 (2010). 『物語 上野動物園の歴史』 中央公論新社.
- 佐賀県立九州陶磁文化館 (2016). 『日本磁器の源流：特別企画展』 佐賀県立九州陶磁文化館.
- 佐々木時雄 (1987). 『動物園の歴史』 講談社学術文庫、講談社.

- 新村出 (2018). 『広辞苑』 第7版、岩波書店.
- スターネック, V. J. 著/林寿郎日本語版監修 (1967). 『世界の動物百科』 岩波書店.
- 高木春山著/荒俣宏監修 (1989 [1852]). 『草木図説』 リプロポート.
- 高島春雄 (1955). 『動物渡来物語』 学風書院.
- 田中芳男訳 (1871). 『泰西訓蒙図解 (下)』 文部省.
- 田中芳男 (1877). 『博物図 鳥獸ノ部』 玉井忠造等蔵版
- 棚橋一郎 (1912). 『日用舶来語便覧』 光玉館.
- 谷崎潤一郎 (2010 [1910]). 『谷崎潤一郎マゾヒズム小説集』 集英社.
- 富原芳彰編/福原麟太郎・岩崎民平監修 (1964). 『基本英語百科辞典』 研究社.
- 中野美代子 (1983). 『中国の妖怪』 岩波書店.
- 松田毅一 (2001). 『天正遣欧使節』 新装版、朝文社.
- 中村聡 (2013). 「麒麟になれなかったキリン」『新しい漢字漢文教育』 全国漢文教育学会、第 57 号、29-42.
- 西村三郎 (1999). 『文明のなかの博物学 西欧と日本 (下)』 紀伊国屋書店.
- 野中夏実 (2004). 「メディチ家のヴィラの庭園 —ポッジオ=ア=カイアノー—」『埼玉女子短期大学研究紀要』 埼玉女子短期大学、第 15 号、177-191.
- 春名徹 (1979). 『にっぽん音吉漂流記』 晶文社.
- 林亮太 (2019). 「博物館と生態学 (31)」『日本生態学会誌』 第 69 号、139-144.
- ベルトルト・ラウファー著/福屋正修訳 (1992). 『キリン伝来考』 博品社.
- 松田毅一 (2001). 『天正遣欧使節』 新装版、朝文社.
- 宮下三郎 (1977). 「麒麟とキリン」『知の考古学』 第 11 号、77-81.
- みやじましげる (1983). 『田中芳男伝』 田中芳男・義廉顕彰会.
- 夢現舎 (2017). 『キリンビールの 110 年 絵で見る歴史図鑑』 彩流社.
- 村端五郎 (2005). 「牧野富太郎が英和辞書の訳語に与えた影響について —'Plum' の訳語を事例として—」『紀要』 四国英語教育学会、第 25 号、11-20.
- 村端五郎 (2006). 「Apple —その「実」と「名称」をめぐって—」『国際社会文化研究』 高知大学国際社会コミュニケーション学科、第 7 号、105-128.
- 村端五郎 (2007). 「Apple はリンゴ (林檎) に非ず —英和辞書における Apple 訳語の変遷について—」日本英学史学会 中国・四国支部平成 19 年度第 2 回研究例会 (口頭発表).
- 山口佳紀 (2008). 『暮らしのことば 新語源辞典』 講談社.
- 山田俊雄・築島裕・白藤禮幸・奥田勲 (2000). 『現代国語辞典』 第 2 版、新潮社.
- 湯城吉信 (2008). 「ジラフがキリンと呼ばれた理由 —中国の場合、日本の場合 (麒麟を巡る名物学 その一)」『人文学論集』 大阪府立大学、第 26 号、69-96.
- 吉田金彦 (2001). 『語源辞典 動物編』 東京堂出版.
- 和田咲子 (2003). 「フランチェスコ・デ・メディチの蒐集活動とフィレンツェ絵画における自然主義の発達 —十六世紀コレクションニズムと世界システム—」千葉大学大学院社会文化科学研究科.
- Richard Quarterman Way 著・箕作阮甫訓点『地球説略』 蔓延元 (1860) 年、老皂館蔵版.
- Hiller, W. (1924). An English-Chinese Dictionary of Peking Colloquial. New Edition Enlarged by T. Backhouse and S. Barton. Shanghai: The Presbyterian Mission Press.
- Spinage, C. A. (1968). The Book of the Giraffe. London: Collins.

(2021 年 4 月 12 日受理)